
バカと仮面ライダーと召喚獣

KIBA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと仮面ライダーと召喚獣

【Nコード】

N4680T

【作者名】

KI B A

【あらすじ】

仮面ライダーが大好きで、藤堂カヲルの孫である土が文月学園で明久達と学園生活をおくる物語です。
現在、清寮祭中です
祝5万PV！

プロフィール

主人公設定

名前：藤堂 士 16歳

好きなもの：仮面ライダー、友達、誰かのために一生懸命になれる人、人を信じる心、ミルクセーキ

嫌いなもの：友達を信じてない人、辛いもの、苦いもの

容姿：中性的で、よく女に間違えられる。そのせいか、女装させられることもよくあり、

あまり抵抗がない。

一応、主人公で、見た目と裏腹に熱い心を持っている。普段は自由だが、友達が傷つけられると本気で怒る。

戦闘力は鉄人並みで、学力は保健体育以外Aクラス上位で、数学は学年トップ。

召喚獣は特別でなぜか、召喚してからライダーに変身しないと戦えなくなっている。

高二の振り分け試験の直後に転校してくる。

作「この作品が処女作ですが、よろしくお願いします。」

第一話　なにこともまず始まりから　（前書き）

士「なあ、これって読む人いるのか？」

作「……なんとかなるよ、多分」

士「本当に大丈夫なのか？」

第一話　なにこともまず始まりから

春、それは、桜が咲く季節。俺は、新しい学校に期待と不安と不満を持ち、足をふみいれた。

「おい、遅刻だぞ！土」

そういつて俺に声をかけてきたのは、文月学園の先生の一人、西村宗一だった。

「しかたないじゃん。昨日仮面ライダーの映画が夜遅くにやってたんだもん。文句言っなら俺じゃなくて、あんな時間に放送した人に言ってよ。」

「ハア…。お前はいい加減録画することを覚えろ…。まあいい。お前は学園長の考えで振り分け試験を受けてないからFクラスだ。」
そう、俺はあのクソババアのせいで無理やりFクラスに行くことになってしまったのだ。

「…あのクソババアめ。だが、設備が気に入らないなら奪えばいい。」

「血が騒ぐようだな。土、お前はまず職員室に行ってから教室に行け。」

「りょーかい。」

さて、Fクラスは俺を楽しませてくれるだろうか。楽しみだな。

（Fクラス）

「えー、今日から転校生がきます。」

「先生、男ですか、女ですか？」

「男です。きてください。」

「藤堂土です。」

「…「男の娘キター！！」」」

…なんだこいつ等、面白そうじゃん！

第2話　五月蠅いのは嫌いだ

俺はまず席に座りたかったので、とりあえず、窓際の席(?)に座ることにした。

すると、隣に座っていた男(?)が話しかけてきた。

「お主、平気なのか？」

「ああ、慣れてる。お前もそうだろう？」

「お主、わしが男だとわかるのか？」

「ああ。」

「うれしいのじゃ！」

男はそう言っていると、嬉しさのあまり俺に抱きついてきた。って、こんなことされたらあいつらが…

「「美少女同士の絡み合い、眼福じゃー!!」」「」

…やっぱり

「あつ、すまぬ。」

「ああ、大丈夫だ。」

「そうかの？　そういえば、自己紹介がまだじゃったの。わしは木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。よろしくなのじゃ士」

「俺は、藤堂士。好きなものは仮面ライダーだ。よろしくな秀吉。」

「…藤堂だと？　お前、学園長と何か関わりがあるのか？」

そう言っただけに入ってきたのは赤髪の男だった。

「ああ、あのババアは俺の祖母さんだ。えっと、お前は？」

「俺は坂本雄二、このクラスの代表だ。よろしく頼む、士。」

「こちらこそよろしくな雄二。ところであの五月蠅いの黙らせていい？」

「いいぞ。」

「さんきゅー。」

俺は、雄二に礼を言っただけから五月蠅いクラスメートをぶっ飛ばしていった。

「お前、強いんだな…」

「鍛えてますから。ああ、大丈夫、友達には手を出さないから。」

「…ああ。」

「あのー、そろそろ自己紹介はじめていいですか？」

「すみません先生。」

そして、廊下側から自己紹介が始まった。ああ、クソ眠い。しかたない、自分の番が来るまで寝るか。

第2話　五月蠅いのは嫌いだ　（後書き）

なかなか進まないですが暖かく見守ってください。

第3話 さあ、幕開けだ

「……のじゃ、……のじゃ、士。」

「ったく、何だよ？」

せつかく、人が寝ていたのに……一体なんだよ？

「自己紹介、お主の番なのじゃ。仕方なかったんじゃから睨まないでほしいのじゃ。」

自己紹介？ああ、そんなのあったな。

「名前は藤堂士で、学園長の孫だ。得意教科は数学で、苦手は保健体育でいつも一桁だ。好きなものは仮面ライダーと甘いもの。これからよろしく。」

ふう、とりあえずこれでいいだろうと思い、俺は席に座った。そういえば、このクラス女子が見当たらないな。やはりそこまで頭の悪い人はいないのか？

「……です。」

おお、女子の声だ。一人くらいやっぱりいるよね、頭の悪い女子。

「趣味は、吉井を殴ることです。」

……はい？

「なあ、秀吉。あれってどういうこと？」

「島田のことか？あやつは、ドイツ育ちじゃから問題が読めんかったのじゃろう。」

「そつちじゃなくって、趣味のほうだよ。もしかしてツンデレってやつ？」

「うむつ、そうじゃ。ちなみにその吉井明久は、……ダアア……イーン……！」

「そ、そうか。」

ガラッ

「あの、遅れて、すいま、せん……」

「ちょうど好かったです。姫路さんも自己紹介をお願いします。」

「は、はい！あの、姫路瑞希です。よろしく願います。」

俺はみんなの目が点になるのを見て、不思議に思い秀吉にそのことを聞いてみた。

「姫路は本来学年次席レベルなのじゃよ。」

「ああ、そういえば試験を途中欠席した人がいたなあ。」

「しっておったのか？」

「流石に誰かは知らなかったけどな。」

俺らはそのことではばらく盛り上がった。

「雄二の番じゃな。」

「ああ。」

「俺は坂本雄二、このクラスの代表だ。俺のことは好きに呼んでくれ。」

「さて、皆に聞きたい。この境遇不満ではないか？」

「そうだそうだ！」

「いくらなんでもひどすぎだ！」

「そこでだ、俺たちFクラスは、Aクラスに『試召戦争』を仕掛けようと思う。」

このとき、雄二は戦争の引き金を引いた。

そして、俺は心の中でこう呟いた。

「お前のカリスマ性を見せてもらおう！」

第3話　さあ、幕開けだ（後書き）

ここまで読んでいただいた方、ありがとうございます。
できれば感想ももらえると嬉しいです。

第4話　雄二の演説

「俺たちFクラスはAクラスに『試召戦争』を仕掛けようと思う。」

雄二はそう高らかと宣言した。しかし、クラスメートたちの反応は、

「勝てるわけない。」

「これ以上設備を落とされたくない。」

「姫路さんがいたら、何もいらない。」

「士、秀吉、好きだ!」

と、否定的だ。

「つて、最後の二人は関係ないだろ……」

「じゃが、あやつらの言うことももつともじゃ。」

「まあ、雄二には何か考えがあるんだろ。」

「皆の言うことは最もだ。だが、このクラスには勝てる要素が揃って。いまからそれを説明する。」

その言葉に皆静まり返った。

雄二はある一点に目を留めると

「康太。いつまでも姫路のスカートの中を覗いてないで、前に出て来い。」

「……っ!! (ブンブン)」

「は、はわ!」

雄二の言葉に慌てて、手と首を横に振り否定している康太と呼ばれた少年は、畳の跡を隠しながら前に出てきた。

「こいつはあの有名なムツツリー二だ。」

「バカな、やつがそうだと。」

「だが、いまだに畳の後を隠そうとしているぞ。」

「ああ、ムツツリの名に恥じない姿だ。」

「なあ、ただのムツツリスケベってことだよな？」
「うむ。」

「姫路のことは説明するまでもないだろう。」

「えっ！私ですか？」

「ああ、ウチの主戦力だ。期待している。」

姫路は学年次席レベルらしいから、当たり前だな。

「木下秀吉だっているし、当然俺も全力を尽くす。」

雄二は元神童らしいからな

「お前ってすごいのか？それとも、姉のほうか？」

「姉上のほうだと思うぞい。じゃが、何故姉上のことを知っている？」

「一応お前らは有名だからな。たぶんお前は姉に変装して何かさせられるだろうな。」

「そうかの？」

「ああ、あくまで俺の予想だから実際どうなるかは分らんが、一応覚悟はしておいたほうがいいぞ。」

「わかったのじゃ。」

「それに、吉井明久だっている。」

……シーン……

「ちょっと雄二、何でそこで僕の名前を出すのさ？みんなの士気が

下がっちゃったじゃないか！って何で皆、僕を睨むのさ？」

「知らないなら教えてやる、こいつの肩書きは『観察処分者』だ。」

「…それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？」

「ち、違うよ、ちょっとお茶目な…」そうだ、バカの代名詞だ。」
「って雄二なんてことをいうのさ！」

「あの、それってどういうものなんですか？」

「こいつの召喚獣は物や人に触れることができ、主に教師の雑用をするんだ、姫路。」

「へえー。それって凄いですね。」

「ああ、フィードバックが来る代わりに、他の人より召喚獣の操作が上手い。頑張ればBクラスレベルなら一対一で互角に戦えるだろうな。」

「よく知ってるな、士。」

「流石にそれくらいはな。」

「とにかくだ、俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服したい。皆この境遇は大いに不満だろう？」

「…当然だあ！！」「」

「ならば全員筆をとれ！出陣の準備だ！」

「…おおおー！！！！」「」

「俺たちに必要なのは、卓袱台ではない！システムディスクだ！」

「…おおおー！！！！」「」

ここに、試召戦争の火蓋が切って落とされた。

第4話　雄二の演説（後書き）

士「試験前日なのに平気なのかよ？」

作「さあーで、勉強しよ。」

士「今からするのかよ!？」

第5話　戦え！

皆のテンションが上がっている中、雄二は

「明久には、Dクラスへの宣戦布告のための使者になってもらう！」

「……下位クラスの宣戦布告の使者って大抵酷い目にあわされるよね？」

「そうなのか、秀吉？」

「うむ、大抵そうじゃぞ。」

「なるほど……。雄二！」

「何だ、士？」

「俺もついて行く、そうすれば吉井も大丈夫だ。」

「何が狙いだ？」

「だって俺、試験受けてないからDクラス戦何も出来ないんだよ。」

「つまり、少しは皆の役に立ちたいってことか？」

「ああ。」

「……わかった、行つて来い。明久もこれならいいだろう？」

「わかったよ。じゃあ、行こうか士。」

「おーけー。」

ということで俺はDクラスに行く事になった。

「大丈夫かな……？」

「何とかなるだろ。（ガラッ）失礼しまーす。このクラスの代表はどこですか？」

「俺だが、何のようだ？」

「吉井君が何か言いたいことがあるらしいです。」

「何で僕に振るの？まあいいや。えっと、僕たちFクラスはDクラスに宣戦布告します！」

「わかった。いつ始めるの？」

「今日の午後からです。それじゃ、失礼しました。」

「ちよつとまった、そうすんなり返すと思ったかい？」

Dクラスの代表がそう言うのと、吉井に対し拳を振りかぶった。

＼土side out＼

＼明久side＼

「そうすんなり返すと思ったかい？」

代表はそう言うのと、僕にパンチを繰り出してきた。って危ない！
「うわああ！」

殴られる、そう思った瞬間

ガシィ…！

「なぜ邪魔をする？」

「普通は止めるだろう。」

土がパンチを片手で受け止めていた。

「それに、Dクラスがここまでヘタレで心が狭いとは思わなかったしな。」

「なんだと！？」

「俺らの発言が気に入らないなら、戦争で叩き伏せればいい。なのに明久を殴ろうとしたってことは、俺らと戦うのが怖いってことだろ？違うなら、俺らは帰っていいよな。」

「……クソツ！覚えてろよ！」

僕らはそのまま教室を出て行った。

＼明久side out＼

＼土side＼

ハア、やっちまった。あんまり目立つようなことしなかったん

だがな。前の学校の時もいままで居場所が無くなっちまったんだよな…

「大丈夫か、吉井？」

「うん。ありがとう、士。それと、さっきみたいに明久って呼んでほしいな。」

「ああ、わかったよ明久。」

俺はその時、少しだけ救われた気がした。

「おつ、無事だったか二人とも。」

「うん。危なかったけど士が助けてくれたんだ。」

「ああ。けど、ついカツとなって相手を挑発しちゃった。」

「いや、それでいいんだ。そっちの方が戦いやすいしな？」

「どういうことじゃ？」

「いまからミーティングをするから、その時説明する。」

という雄二の言葉に従い、主要メンバーは屋上へ移動した。

「それで、時間は伝えたのか？」

「ああ。今日の午後に開戦と言って来た。」

「じゃあ、お昼が先ですね？」

「ああ、明久。今日の昼くらいは、まともなもの食つとけよ。」

「そう思うなら、パンくらい奢ってくれろと嬉しいな。」

「どういうことだ？」

「あれ？吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

「こやつの主食は水と塩なのじゃ。」

「失礼な！砂糖も食べてるよ。」

「それは食べるとは言わない、舐めるだ。」

「……あの、よかつたら私が、お弁当作ってきましようか？」

「え？……ホントにいいの？」

「はい、明日の昼でよければ。」

なるほど、姫路も明久が好きなのか。まあ、本人は鈍感そうだし気付いてないみたいだな。

「ふーん、瑞希って優しいのね、吉井だけに作ってくるなんて。」

「嫉妬か、島田？」

「なっ！ち、違うわよ！」

「ならお前も作ってくればいいじゃないか？」

「そうね……」

「あつ、あの。もしよければ皆さんにも……」

「え？俺たちにも？いいのか？」

「はい、嫌じゃなかったら。」

「なら、姫路と島田が4つづつ作ってくればいいじゃん。もちろん明久が二人分食べばいいだろ。」

「そうね。」

「わかりました。」

そう、俺たちは知らなかったのだ。この約束が後に残劇を残すことになることなど知らなかったのだ。

第5話　戦えー（後書き）

作「結構書いたな。」

士「お前、明日も試験だろ？しかも苦手な社会の。」

作「大丈夫、今回は前々から勉強してたから。」

士「ったく。つーか、やっとじゃねーか原作キャラと絡みがあんの。」

「

作「ああ。長かった。それに、少しだけ士の過去が出てきたよね。」

士「ホントに少しだけだな。」

作「まあ、とりあえず

作・士「これからよろしく願いします！」「」

第6話　始動！

姫路と島田が弁当を作るということで、その場は収まった。

「なあ、ミーティングは？」

「ああ、すまん。忘れてた。試召戦争に戻ろう。」

「雄二。一つ気になっていたんじやが、どうしてDクラスなんじや？ 段階を踏んでいくならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラスじゃろう？」

「そついえば、確かにそうですね。」

「いや、Eクラスは戦うまでもない、確実に勝てるだろう。そうだと雄二？」

「ああ。そうだ。」

「え？ でも、僕らよりはクラスが上だよ？」

確かにクラスは上だ。だが、

「ま、振り分け試験の時点では確かに向こうが強かったかもしれない。けど、実際のところは違う。お前の周りにいる面子をよく見てみる。」

「美少女二人と馬鹿が二人とムツツリが一人と力の強い美少女が一人いるね。」

「誰が美少女だと！？」

「雄二、お前は馬鹿だろ。」

「……………（ポツ）」

「お前はムツツリだろ！ それに、俺は男だバカ久。」

「酷い！ 今の返しは酷いよ！」

「まあまあ、落ち着くのじや、皆の衆。」

「お前も、美少女にカテゴリされてることに気づけよ……」

「まあ、要するにだ。姫路に問題のない今、正面からやり合ってもEクラスには勝てる。Aクラスが目標である以上はEクラスなんか

とやり合っても意味がないってことだ。」

そう、俺等の暮らすには姫路がいる

「それならDクラスとは正面からぶつかると厳しいの？」

「ああ。確実に勝てるとは言えないな。」

「だったら、最初からAクラスに挑もうよ。」

「バカ久、少しは考えるよ。」

「失礼な！考えてるよ。それと、バカ久はやめて！」

「そうよ！それに、アンタは何でかわかるの？」

「ああ。大方、初陣だからとか景気づけだとかそんな感じだろ？」

「そうだ。それに、さっき言いかけた打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだしな。」

「あ、あの！」

「ん？どうした姫路。」

「えっと、その。さっき言いかけた、って……吉井君と坂本君は、前から試召戦争について話し合ってたんですか？」

「ああ、それか。それはついさっき、姫路のためについて明久に相談されて……それはそうと！」

「バレバレだぞ、明久。」

「うっ。そんなことより、Dクラスに勝てなかったら意味ないよ。……逃げたな。だが、明久の言う通りだ。」

「負けるわけないさ。」

俺等の心配を笑い飛ばす雄二。

「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる。いいか？お前ら。ウチのクラスは……最強だ。」

それは不思議な感触だった。

根拠のない言葉なのに、なぜかその気になってくる。

雄二の言葉にはそんな力があるみたいだ。

「いいわね、おもしろそうじゃない！」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの。」

「……（グッ）」

「が、頑張りますっ。」

「学力だけじゃない、という事を教えてやろう。」

打倒Aクラス。

荒唐無稽の夢？上等！

俺等の力、見せてやる！

「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう。」

涼しい風がそよぐ屋上で、俺らは勝利のための作戦に耳を傾けた。

第6話　始動！　（後書き）

士「ほとんど原作じゃねーか。」

作「しゃーねーだろ。お前が入れにくい回だったんだから。」

士「じゃあ、次の回からはもっと頑張れよ」

作「ああ、そうだな。」

第7話 F vs D

「さあ、皆逝つて来い！」

「「「うおおおお！」」」

こうして、試召戦争が幕を開けた。

俺らはどうと、

「お前らは回復試験を受けてこい。」

「りょーかい。」

「はいっ。」

回復試験を受けることになった。

「高橋先生、Fクラス藤堂士と姫路瑞希が回復試験を受けます！」

「分かりました。姫路さんは全教科、士君は4教科でいいですか？」

「「はい！」」

「それでは、座ってください。これより、回復試験を始めます。」

俺は高1の頃、6教科だけ受けていたらしく、4教科だけですんだ。

まずは、英語

カリカリカリッ

快調快調。次は物理

カッカカカカッ

そして、世界史。

…カリッカリカリッ

クソ！わかんねえ！世界史とか本当いらねーよ

最後は数学

ガッガガガガッ！

うん。やっぱり数学は楽しいね。

「先生、次ください。」

「もうありません。ですから、これで終わりです。」
「はい。」

「終わったのか？」

「ああ。」

「見せてみる。……お前、Aクラスレベルじゃないか。しかも、数学が。」

「けど、世界史が235点で、保健体育が2点だぞ。」

「それは、皆がフォローしてくれるから大丈夫だ。けど、今回は出てくるな。」

「わかった。」

ピンポンパンポン

『船越先生、船越先生。』

『吉井明久君が体育館裏で待ってます。』

『生徒と先生の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです。』

『

…はい？

「なあ雄二、船越先生って…」

「ああ。単位を盾に交際を迫る、あの船越先生だ。」

……明久。ご愁傷様。

「骨は拾ってやる。安心して逝ってこい。」

「そこまでののか？」

「ああ。俺も一度襲われかけた。そのときは宗一が助けてくれたが。」

「

「そ、そうなのか。すまない、明久。」

「そろそろ、明久たち回収したほうがよくないか？」

「そうだな。じゃあ、本隊しゅつじんだ！」

「「「うおおお。」」」

そういつて、あいつらはいなくなった。

「はあ、暇だ。絵でも書くか。」

俺はそう思い、仮面ライダーの絵を描き始めた。

〈10分後〉

「おつ。無事だったか。」

無事、本隊と明久の班が帰ってきた。

「うん、なんとかね。これから回復試験を受けてくるよ。」

「ああ。いつてら。」

明久は試験を受けに行った。

「なあ、雄二。」

「なんだ。」

「あのこと言ったのか？」

「まだ言っただない。あいつが回復試験終わったら言う。」

「そうか。」

俺は、絵の続きを描き始めた。

〈50分後〉

「おつかれ、明久。」

「うん。ありがとう。」

「明久、よくやった。」

「校内放送聞こえてた？」

「ああ、バッチリな。」

あいつ、明久の不幸が好きなのか？

「須川君がどこにいるか知らない？」

なるほど。放送したのは須川つてやつなのか。

「もうすぐ戻って来るんじゃないのか？」

「やれる、僕なら殺れる……！」

「「殺るなつての。」」

「ちなみに、だが。」

言うのか？

「あの放送を指示したのは俺だ。」
言っただな。

「シャアアッ！」

あれ、包丁だよな？ ったく。

「あ、船越先生。」

「ちいっ！」

「……一秒かからなかったぞ。あいつ、人間か？」

「さあな。さて、馬鹿は放っておいて、そろそろ決着つけるか。」
「そうじゃな。頃合じやろう。」

「……（コクコク）」

「おっしや！ 代表の首を獲りに行くぞ！」

「「「おうつ！！」」」

「がんばれー」

「「「Yes my princess!!」」」

「俺は男だってば……」

……あいつらもいなくなったし、いいだろう。

「明久、船越先生が来たって言うのは嘘だ。」

……。

「逃がすか、雄二い！」

……あいつ、どんな肉体カラダしてんだ？

結局、戦争は姫路が勝つたらしい。

俺は、雄二に呼ばれて戦後会談に出向いている。

……あれ？ 何もしてないのに、何で俺も行くんだ？

第7話 F vs D (後書き)

読んでくれている皆さんありがとうございます。
できれば、感想をいただけると嬉しいです。

第8話　雄二 VS 平賀

俺は雄二に呼ばれ、戦後対談に参加した。そこでは明久が雄二に手首を捕まれてた。

「何してんだ、お前ら。」

「やっときたか、土。」

「ああ、すまない。けど、何で俺も参加するんだ？」

「お前は主要メンバーの一人だし、後であいつらにお前に説明してもらう。」

「それは分かったけど、明久は何をやってるんだ？」

「も、もちろん、喜びを分かち合うための握手を手首がもげるほどに痛いっ！」

「お前、馬鹿だろ。」

「おい。誰かペンチを持ってきてくれー。」

「ここに有るけど、なんにつかうんだ？」

「す、ストップ！僕が悪かった！」

「……チッ。」

「堂々と舌打ちするなよ……」

それにしても、ペンチをが何に使う気だったんだ？

「……ブツブツ……」

ん？何て言ってるんだ？

「……生爪……」

うん。こいつには下手に逆らわない方がいいだろう。

「まさか姫路さんがFクラスだなんて……信じられん。」

背中から誰かの声。振り向くとそこにはヨタヨタと歩み寄る明久を殴ろうとしたDクラスの代表の姿があった。

「あ、その、さっきはすみません……。」

姫路がDクラス代表もとい、平賀に謝っていた。

「いや、謝ることはない。全てはFクラスを甘く見ていた俺達が悪いんだ。」

「そうだぞ。第一、これは戦争なんだ。相手を倒すたびに謝っていたら負けるぞ。」

「つ、土君!？」

「君はあのとときの!これを予測していたからあんなこといったのかい?」

「いいや。しよせんFクラスと俺らをなめていた時点でお前らの負けだよ。ウチの代表を甘く見すぎだ。」

「そうだね。今更だが、あときはすまない。」

「いや、こっちも熱くなりすぎた。」

「それじゃあ、ルールに則ってクラスを明け渡そう。ただ、今日はこんな時間だから、作業はあしたで良いか?」

「もちろん明日で良いよね、雄二?」

流石に、今日中に済ませるなんていえないよな。

「いや、その必要はない。」

どういうことだ?

「Dクラスを奪う気はないからだ。」

ああ。そういうことか。

「Bクラス戦への布石か?」

「ああ。よく気づいたな。」

「まあな。」

「ねえ。二人とも、どういうことなの?」

「少しは自分で考えろ。そんなんだから、お前は近所の中学生に『馬鹿なお兄ちゃん』なんて愛称をつけられるんだ。」

「惜しいぞ雄二。正確には、近所の小学生だ。」

「……人違いです。」

「まさか……本当に言われたことがあるのか……?」

「ああ。しかも、去年だ。そういえば明久。」

「な、なに?」

「あの時貸した5000円返せ。」

「お前、明久に貸したのか？」

「ああ。」

「こ、今月は無理だから、来月返すよ。」

「分かった。」

「良いのかよ…。と、とにかくだな。Dクラスの設備には一切手を出すつもりはない。」

「それでいいのか？」

「もちろん、条件がある。」

俺たちを置いて交渉を再開する雄二と平賀。

「一応聞かせてもらおうか。」

「なに。大したことじゃない。俺が指示を出したら、窓の外にあるアレを動かなくしてもらいたい。」

そう。雄二が指したのはDクラスの窓の外に設置されているエアコンの室外機。

ただし、Bクラスの室外機だ。今度の戦いではこれが鍵となるだろう。

「Bクラスの室外機か。」

「設備を壊すんだから、当然教師にある程度睨まれると思うが、そう悪い取引じゃないだろ？」

「それに、最悪俺が祖母さんに取り合うからそこまで厳しい罰はないと思うよ。」

「……そうか。ではこちらはありがたくその案を吞ませて貰おう。」

「タイミングについては後日詳しく話す。今日はもう行っていいぞ。」

「ああ。ありがとう。勝てるわけはないと思うがお前らがAクラスに勝てるよう祈ってるぞ。」

そういつて、平賀君は去っていった。

「さて、皆！今日はご苦労だった！明日は消費した点数の補給を行うから、今日のところは帰ってゆっくりと休んでくれ！解散！」

雄二が号令をかけると、皆雑談を交えながら自分のクラスへと向かい始めた。帰りの支度をするのだろう。

俺はというと、秀吉と家が近いことが分かったので一緒に帰ることにした。

「のう。お主今日は何しておったのじゃ？」

「えっと、回復試験受けて、そのあと雄二に今回は出てくるなって言われてたからずっと教室にいたけど。どうしたんだ？」

「姉上に途中であつての。そのときに、お主の事を探しておったみたいで、わしも探したんじゃが居なくて不思議に思つたんじゃ。」

「そんなことがあったのか。」

「お主、姉上に会ったことがあるのか？」

「ああ。あいつが不良に絡まれてたのを助けて、お礼がしたいって行つてたから今度会つたときでいいってかえしといたんだ。」

「つまり、お礼は入らないって事かの？」

「ああ。もう会うことはないって思つてたからな。」

「じゃあ姉上には、お礼はいらないって言つておくぞい。」

「ああ。たのむ。」

「む。あれは雄二ではないかの？」

「ん？ああ、そうだな。」

「あつ、士！少し聞きたいことがあるんだが、いいか？」
「一体なんだ？」

「何だ？」

「わしは居ないほうがよいかの？」

「いや、居てもらつて構わない。」

士、お前はどこまで理解したんだ？」

第8話 雄二 VS 平賀 (後書き)

作「やつと戦後会談までかけたよ。」

士「やつと1巻の真ん中あたりだな。」

作「ほんと、文才が欲しいよ。」

士「そんなのは、書いて慣れていくしかないだろ。」

作「ああ。ということで、」

作・士「バカと仮面ライダーと召喚獣をこれからもよろしく願います!」「」

第9話　非日常の平穩（前書き）

名前で呼び捨てを早めに入れておきました。

第9話 非日常の平穩

「どういうことだ？質問の意味が分からん。」

「ああ、すまない。お前は俺の次の手が分かったのか？」

「ああ。Bクラスに攻め込んで土屋の保健体育で止めを刺すんだろ？」

「何故分かった？」

「俺はこのクラスの点数と教師の特徴を理解しているつもりだからな。」

「どういうことなのじゃ？」

「まず、土屋の保健体育の点数は分かるだろ？」

「うむ。」

「保健体育の教師の特徴は？」

「並外れた行動力じゃが…、なるほどのう。」

「そういうことだ。」

「お前、いつ気づいた？」

「お前がDクラスと設備交換をしない言ったあたりからだ。」

「お主、あれだけで分かったのか。」

「お前が仲間で助かったよ。」

「そうか？じゃあ、俺はこっちだから。」

「ああ。じゃあな。」

「また明日なのじゃ。」

俺はそういつて雄二たちと別れた。

さて、帰ってゲームでもするか。もうすぐでナ●ガの討伐数が100いくんだよね。

「次の日」

「おはよー。」

「おはようなのじゃ。」

「おう士。」

俺はいつも通り登校した。

「明久は？」

「あいつはまだだ。どうせ、「おい坂本！何で設備交換しなかったんだよ？」

予想通り、雄二に突っかかってくるクラスの仲間達。

「それについては士が答えてくれる、頼むぞ。」

人任せかよ。まあ、いいか。

説明開始！

「了解。えっと、俺等の目標はなんだ？」

「「「打倒Aクラスです、My princess!」」」

「だったら、Dクラスの教室なんか必要ない。だから、別のことをさてたんだ。わかったか？」

「「「Yes my princess!」」」

説明終了！

「これでいいんだろ？」

「ああ。すまない。」

「あんな適当な説明で理解するんじやのう。」

「それがあいつ等の取り柄だからな。」

「おはよー」

「おう明久。遅刻ギリギリだな。」

本当にギリギリだな。

「ん、おはよう雄二に秀吉に士。」

「おはよー。」

「おはようなのじゃ。」

明久に挨拶を返す俺と秀吉。

「皆には何も言われなかったの？」

「ん？なにがだ？」

「Dクラスの設備のこと。」

「ああ。さつき士に説明してもらったからな。問題ない。それよりお前は良いのか？」

何かしたのか？

「何が？」

「昨日の後始末だ」

「うん。いくら僕でも、生爪を剥がされると分かっているから行動するなんてありえないよ。」

「いや、俺の始末じゃなくて。」

もしかして、船越先生のことか？

「一体何が言いたい「吉井っ！」「ごぶあっ！」」

明久の台詞が突然の拳で遮られる。

「し、島田さん、おはよう……」

「おはようじゃないわよっ！」

「明久。何か馬鹿なことしたのか？」

「あ、士。聞いてよ！吉井が、昨日ウチを見捨てただけじゃ飽き足らず、消火器のいたずらと窓を割った件の犯人に仕立て上げたのよ……！」

「それは明久が悪い。だが、島田もやりすぎだ。二人に罰として島田は明久の事をアキまたは明久と、明久は島田の事を美波と呼び週末に島田にクレープを奢ってやること。いいな？」

「わ、わかったわ。えっと、ア、アキ。（／／／）」

「美波、これでいい？」

「ああ。」

「明久。」

「なに、雄二？」

もしかして……

「1時間目の数学のテストだが、船越先生らしいぞ。」

「扉を開けて廊下を走り去るまで1秒かからなかったぞ……？」

「明久、不憫だな。」

本当にご愁傷様。

………そういえば、あいつが人間かどうか考えるのってこれで何回目だっけ？

第10話　弁当の恐怖

「うあー……づかれたー。」

どうやったらあんな声が出るんだ？

「うむ。疲れたのう。」

「……………（コクコク）」

取り敢えずねぎらいの言葉をかけてやろう。

「お疲れ。にしても、よく考えたな。」

「うん。近所のお兄さんを紹介するためって言ったら分かってくれたよ。」

「39才はお兄さんじゃなくておじさんだよ。」

「よし、昼飯食いに行くぞ！今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすつかな。」

食いすぎだろ。

「つか、ちゃんとバランスよく食べないと栄養が偏るんじゃないのか？」

「あ、あの。皆さん……。」

「どうしたんだ、姫路？」

「どうしたじゃなくて、昨日言ってたでしょ。」

おお、そういえば。

「おお、もしや弁当かの？」

「は、はい。迷惑じゃなかったからどうぞ。」

「ウチも作ってきたわよ。」

「迷惑なもんか！ね、雄二！」

「ああ、そうだな。ありがたい。」

確かに、弁当代が浮くし二人の腕前も見れるからな。

「それでは、せっかくのご馳走じゃし、こんな教室ではなくて屋上でも行くかのう。」

「そうだな。屋上のほうが衛生的にいいしな。」

「そうか。それならお前らは先に行つてくれ。」

「どっかに行くのか？」

「飲み物でも買ってくる。」昨日頑張ってくれた礼も兼ねてな。」

「あ、それならウチも行く！一人じゃ持ちきれないでしょ？それと、これがお弁当ね。」

「悪いな。それじゃ頼む。」

「弁当さんきゅーな。」

あ、明久が余計なこと考えてる。

「きちんと俺達の分をとっておけよ。」

「大丈夫だつてば。あまり遅いとわからないけどね。」

「そう遅くはならないはずだ。じゃ、行ってくる。」

雄二と島田は財布を持って教室を出て行った。

「僕らも行こうか。」

「そうですね。」

明久が姫路のを、俺が島田の弁当を持って屋上まで歩く。

「天気がよくて何よりじゃ。」

「……………（コクコク）」

「そうだな。」

絶好の弁当日和。

「あ、シートもあるんですよ。」

姫路がバッグからビニールシートを取り出す。

よくあんなサイズが入ったな。

「あの、あんまり自信はないんですけど……………」

「……………おおっ！……………」

すごく旨そうだ。

「それじゃ、雄二には悪いけど、さきに」

「……………（ヒョイ）」

「あっ、ずるいぞムツツリー二つ。」

「……………（パク）」

ボタン！

ガタガタガタ

豪快に顔から倒れ、小刻みに震えだした。

「……………」

秀吉と明久と顔を見合わせる。

「わわっ、土屋君！？」

「……………（グッ）」

すごく美味しいぞ と伝えてるつもりだろう。

「あ、お口に合いましたか？よかったですつ。」

言いたいことが伝わったのか、喜ぶ姫路。

だが、あの姿は死に掛けにしか見えないんだが。

「よかつたらどんどん食べてくださいね。」

姫路が笑顔で勧めてくる。

（…………二人とも。あれ、どう思う？）

（どう考えても演技には見えん。）

（ああ。）

アレが演技だとして、何になるのだろうか。

（明久。身体は丈夫か？）

（正直胃袋に自信はないよ。）

表情はとうぜん笑顔のままだ。

「おう、待たせたな。へー、こりゃ旨そうじゃないか。どれどれ？」
そこに雄二登場。

「あ、雄二。」

パク

ボタン——ガシャガシャン、ガタガタガタ

ジュースの缶をぶちまけて倒れた。

「さ、坂本！？ちよつと、どうしたの！？」

ん？この臭い、硫酸に水酸化ナトリウムか？

何でこんなものが料理に使われるんだよ！？

「あ、足が攣つてな。」

何とか誤魔化す雄二。

「ところで島田さん。その手についてるあたりにさ、」

「さつきまで虫の死骸があつたぞ。」

「ええっ！？早く言つてよ！」

「すまん。」

「手を洗つてくるわ。」

席を立つ島田。

（明久、今度はお前が行け！）

（雄二がいきなよ！姫路さんは雄二に食べてもらいたいはずだよ！）

ああ、もう。こうなつたら、

「あ！姫路、アレは何だ！？」

「えっ？なんですか？」

俺が指した方向を姫路が見る。

（おらあ！）

（もごああっ！）

その隙に明久が雄二の口の中一杯に弁当を押し込んだ。

「ふう、これでよし。」

「いや、よくないだろ。」

せつかく決心したのに。

「……お主ら、存外鬼畜じゃな。」
え？俺も？

「すまん、見間違いだったようだ。」

「あ、そうだったんだですか。」

こんな簡単な手に引つかかられると試召戦争で騙されて負けそうだな。

少し、気をつけさせないと。

「お弁当美味しかったよ。ご馳走様。」

「うむ、大変良い腕じゃ。」

「あ、早いですね。もう食べちゃったんですか？」

「うん。特に雄二が『美味しい美味しい』って凄い勢いで。ね？雄二。」

「う……う……。あ、ありがとうな、姫路……。」
ヤバイ、目が虚ろだ。

「じゃあ、次は島田のを食うか。」

「うん。そうだね。」

ふう、これで また作ってくる なんていわないだろう。

ああ、平和だ。

「あ、そうでした。」

「ん？どうした？」

「実はですね——」

ま、まさか……

「デザートもあるんです。」

「ああっ！姫路さんアレは何だ？」

「明久！次は俺でもきつと死ぬ！」

くっ、こうなったら今度こそ

（……俺が逝こう）

（（（士！？））））

（士！？無茶だよ、死んじゃうよ！）

（なら、ワシも半分逝こう）

（秀吉まで！？）

（俺のことは率先して犠牲にしたよな！？）

「どうかしましたか？」

「あ、いや！なんでもない！」

「もしかして……」

姫路が表情を曇らす。

まさか、嫌がつてるのがばれたのか！？

「ごめんなさいっ。スプーンを教室に忘れちゃいましたっ。」
「なんだ、そっちな。」

「ばれたかと思つて焦つたぞ。」

「取つてきますね。」

階下へと消える姫路、チャンスだ。

「では、この間に頂いておくとするかの。」

「ああ。そうだな。」

決心をし、深く深呼吸をする。

「……すまん。恩に着る。」

「ごめん。ありがとう。」

俺らに謝る二人。

「「ああ（うむ）。任せておけ。頂きます」」

決心が鈍らないうちに一気に容器を傾ける俺と秀吉。

「「何だ、意外と普通じゃとゴばあっ！」」

ぐっ、こ、これは、ヤバイ……

「……さっきはすまない、雄二……」

そついつて俺は意識を手放した……。

第10話 弁当の恐怖 (後書き)

作「来ました。姫路さんの弁当!」

士「う……うう……死ぬかと思った……」

作「君は主人公だから大丈夫!」

士「なら、お前も食ってみろ!」

作「もがあっ! (ドサツ)」

士「えっと、作者が失神したので今回はここまでです。」

士「では、これからもバカと仮面ライダーと召喚獣をよろしく願います!」

第11話　生きる幸せ

「ああ……酷い目にあった。」

姫路の弁当を食ってからどれだけ寝てたんだ？

「おお、やつと起きたかの。」

どうやら、秀吉のほうが早く起きてたようだ。

「お主は、午後の補給テストの間ずっと寝てたんじゃ。」

「そうか。まあ俺はDクラス戦は戦わなかったからテストを受ける必要が無いからいいけどな。」

そういえば、明久は？

「明久なら雄二に騙されて一人で宣戦布告に行ったのじゃ。」

「あいつ、馬鹿だろ。」

「今更だな。」

雄二が話に入ってくる。

「お前が言っなよ。」

「まあ、結局自分の意思で行ったんだからいいだろ？」

「そういう問題じゃないと思うんだが……あ、帰ってきたぞ。」

明久がボロボロで帰ってくる。

「……言い訳を聞こうか。」

ボロボロのまま雄二に詰め寄る明久。

「予想通りだ。」

「くきいー！　殺す！　殺し切るーっ！」

「五月蠅い黙れ。」

「ぐふあっ！」

五月蠅かったので取り敢えず明久にはアイアンクロウを食らわせとく。

「やりすぎだろ……」

「そうじゃぞ。」

「大丈夫、気絶しなくて声も出ないギリギリのラインでやってるか

ら。」

「そ、そうか。」

何で顔を青くしてるんだ？

「それはある意味拷問だからよ。」

「？何で俺の考えてることが分かったんだ？って木下姉！？」

「何よ？アタシが居たらいけない訳？それに顔に書いてあるわよ。」

「いや、そういう訳じゃないんだが、Ａクラスが普通Ｆクラスに来るか？それに俺って顔に出やすいか？」

「雄二は分かったかの？」

「いいや、まったく。」

何で二人ともニヤついてんだ？取り敢えず、明久を解放して二人から聞き出すか？

「さ、流石にそれはやめなさい、藤堂君。」

そ、それに今日はアンタにお礼をしに来たのよ。（／／／）

「お礼？」

「この前不良から助けてくれたでしょ。」

「ああ、秀吉から聞いただろ？礼はいらないって。」

「けどそれじゃアタシが納得しないのよ。」

「わかった。じゃあ今日は一緒に帰ってくれ。それでいいだろ？」

「えっ？」

「嫌か？じゃあ、「それでいいわ。」わかった。」

「ただし、今日だけじゃなくてこれからずっとね。」

「それで良いなら良いけど……」

なんか立場が逆になってる気がするの俺だけなのか。

「……き、気のせいよ。」

「目を泳がせたまま言われても説得力が無いぞ姉上。」

「う、五月蠅いわよ秀吉。」

？何だ？

「なんかよく分からんが、帰るぞ二人とも。」

「「わかったわ（のじゃ）」」

取り敢えず明久を解放して帰ることにした。

そういえば、姫路のやつ何してたんだ？

第11話「生きる幸せ」（後書き）

作「ついに優子登場です。」

士「何か微妙なタイミングだったな。」

作「そうだな。次からもう少し考えてから書こう。」

士「今まで考えてなかったのかよ！」

第13話 VS Bクラス 一日目 前編

「次の日」

「さて皆、総合科目テストご苦労だった。」

教壇に立った雄二は皆に対しそう言った。

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は充分か？」

「……おおっ！」「」

「……殺っちゃ駄目だろ。」

「気にしたら負けじゃぞ。」

「そうだな。」

「……か何でこんなにモチベーションが上がってんだ？」

「今回の戦争は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない。」

「……おおっ！」「」

「そこで、前線部隊は姫路瑞希と藤堂士に指揮を取ってもらう。野郎共、きっちり死んで来い！」

「が、頑張ります。」

「……うおおっ！」「」

姫路と一緒に闘えるとあって、前線部隊の士気は最高潮に高まっていた。

「死ぬのは召喚獣だけだよな？」

「うむ。」

キンコンカンコン

いよいよBクラス戦開始だ。

「よし、行ってこい！目指すはシステムデスクだ！」

「サー、イエッサー!」

「皆、キバつていこー!」

「Yes my princess!」

「俺は男だつてば……」

俺らは全力でBクラスへと向かう廊下を駆け出した。

side 士 out

side 明久

「いたぞ、Bクラスだ!」

「高橋先生を連れてるぞ!」

相手の人数は十人程度。あくまで様子見といったところだろうか。

「生かして返すな!」

この台詞が皮切りとなり、Bクラス戦が始まった。

しかし、圧倒的な実力差に第一陣がごとくやられていく。

止めをさされる前にフローしないと戦力が激減してしまう。

するとそこに、

「お、遅れ、まし、た……。ごめ、んな、さい……。」

「すまん。遅れた。」

息を切らして姫路さんがやってきた。

「きたぞ! 姫路瑞希だ!」

Bクラスの誰かが叫ぶ。やっぱりBクラスとなるとAクラスに姫路さんが居ないことを知ってたか。

「姫路さん、来たばっかで悪いんだけど……」

「いや、ここは俺に任せろ!」

姫路さんに頼もうとしたが士がそれを遮ってきた。

「士じゃ無理だよ!」

side 明久 out

side士

「士じゃ無理だよ!」

確かに普通の点数じゃ無理かもしれない。

だが俺の数学は普通じゃない、見せてやる!

「Fクラス藤堂士がここに居るBクラス10人に数学で挑む!」試
獣召喚」

「「「試獣召喚」!」」」

「そんなの無茶だよ士!」

「大丈夫だ。ちゃんと見てなつて。」

「ちゃんと見なきゃいけないのはそつちだろ!」

Bクラスの一人がそういつて突っ込んできた。だが、

バシッ!

バンッ!

俺の召喚獣は相手の刀を白羽取りしてそのまま投げ飛ばした。

「何で武器すら持っていない雑魚に投げ飛ばされるんだよ!」

「それは俺の点数を見てから言いな!」

俺の言葉と同時に点数が表示された。

『Fクラス	藤堂士	VS	Bクラス×10
800点		VS	合計1748点
			』

「「「なに!」」」

「教師以上じゃないか!」

「だが何で俺は戦死してないんだ?」

答えは簡単

「答えはこうだつ!」変身」!」

俺がそう言つと召喚獣の腰からベルトが出てきて、手を前で組む。そして、ベルトの横を押し俺の召喚獣が光に包まれる。

その光から現れたのは仮面ライダーアギト、グランドフォーム、だった。

「どういふことなの、士？」

「俺の召喚獣は特殊でな。何故かいくら点数をとつても召喚獣の強さがFクラスレベルにしかないんだ。だからその打開策として召喚獣に変身させることにしたんだ。そうすることで点数通りの強さになるんだ。」

俺はそう言つて召喚獣を突っ込ませた。

「ハアアッ！」

「「うわっ！」」

一気に2体戦死させる。

「まとめてかかれれば相手は素手だから簡単に倒せるはずだ！」
確かに、それはマズイ。

「だが、俺には腕輪があるんだぜ。合体 フュージョン、！」
「な、なんだ。」

期待通りの反応してくれるなんて嬉しいね。

「……（ドサッ！）」

「え？どうしたの士？」

「俺はこっちだ。」

俺の腕輪の能力は召喚獣の方に意識を持つていくこと。

その代わり本体の方はぶっ倒れるんだけだな。

「ハッ！」

また、召喚獣が光に包まれる。そして剣を持つ、フレイムフォーム、に変身した。

「「「なっ!?」「」」

「一気に蹴散らすぜ!」

そして一気に7体切り倒した。

「これで最後だ!!」

グランドフォームに戻り、必殺技の構えを取り何もできずにいる相手の召喚獣にライダーキックを放った。

「ライダーキック!!!」

「うわああ!!」

ドオン!

爆発音と同時に相手の召喚獣は爆死した。

『Fクラス	藤堂士	V S	Bクラス×10
416点	V S	0点	』

「戦死者は補修!」

どこからともなく宗一が現れて戦死者を担いで行った。

「ねっ。平気でしたでしょ?」

「うん。ていうか知ってたの姫路さん?」

「はい。一緒に回復試験を受けていたので。」

「そっか。」

「それじゃ、皆頑張ってくれ!」

「「「Yes my princess!!!!」」」

「士、とりあえず下がって。」

「ああ。」

「中堅部隊と入れ替わりながら後退!戦死だけはするな!」

そんな相手の指示が聞こえた。取り敢えず狙いは成功。

「明久、士。ワシらは教室に戻るぞ。」

「どうして？」

「Bクラスの代表じゃが、あの根本らしい。」

「根本って、あの根本恭二？」

「うむ。」

……そうか、あいつもこの学校にいるのか…。

「どうしたのじゃ？」

「ああ、少しな。」

「取り敢えず戻っておいた方がよさそうだね。」

「雄二に何かがあるとは思えんが、念のためにの。」

「そうだな。」

俺たちは姫路に一言言ってから教室に戻った。

第13話 VS Bクラス 一日目 前編 (後書き)

作「来ました。遂に変身！」

士「長かったな。」

作「ということで、秀吉に来てもらいました！」

秀「よろしくなのじゃ。」

作「士についてどう思う？」

秀「何か根本と何かがあったらしいが無理しないで欲しいのう。」

士「無理はしないさ。それにそのことはまだ禁止だ。」

秀「そうじゃったの。」

作「次回かその次の回にはその話をするつもりなので

作・士・秀「よろしく願います！」

第13話 VS Bクラス 1日目 後編

side 士

「……うわ、こりゃ酷い。」

「まさかこうくるとはのう。」

「卑怯、だね。」

「あのクソ野郎……！」

今俺等の前にあるのは、穴だらけの卓袱台とヘシ折られたシャープンや消しゴムだ。

根本……ブチ殺す！

「どうしたの、士？」

「いや、何でもない。まあ、こういう時の為に康太にカメラを設置させて置いて正解だったな。」

「ああ。まさか本当に役立つときが来るとはな。」

さあて、カメラに写ってるのは誰かな？

side 士 out

side 明久

「ムツツリー二にカメラを設置させたって、どこにあるの？」

僕がそう聞くと雄二は教室の隅に行き、

「ここだ。」

とカメラを取り出した。

「どこのクラスの奴が写ってるんだ？」

士が聞いた。

（ねえ。何か今の土怖くない？）

（うむ、ワシもそう思っていたところじゃ。）

やっぱり……。根本君と何かあったのかな？

「おつ。Bクラスの奴だ。」

雄二がカメラを確認して言った。

そういえば……

「どうして雄二は教室がこんなになっているのに気づかなかったの？」

「協定を結びたいという申し出があつてな。調印のために教室を空にしていた。」

「協定じゃと？」

「ああ。4時までに決着が付かなかつたら戦況をそのままにして続きは明日午前9時に持ち越し。その間は試召戦争につながる関わる一切の行為を禁止する。つてな。」

「それ、承諾したの？」

「そうだ。」

「でも、体力勝負に持ち込んだ方がウチとしては有利なんじゃないの？」

「姫路はどうだ？」

そこに、ずっとカメラを見ていた土が入ってくる。

「姫路は体力が無いだろうから不利になるだろ。」

あ、そっか。

「あいつらを教室に押し込んだら今日の戦闘は終了になるだろう。」

そうすると、作戦の本番は明日という事になる。」

「そうだね。この調子だと本丸は落とせそうに無いね。だから受けたの？」

「そういうことだ。この協定は俺たちにとってかなり都合が良い。でも、そうすると何かがおかしい。他に何かしてくるつもりだろうか。」

「明久、土。取り敢えずワシらは前線に戻るぞい。向こうで何かさ

れてるかもしれん。」

そういうと、秀吉は教室を駆け足で出て行った。

「ん。雄二、あとはよろしく。」

「おう。シャープや消しゴムの手配をしておこう。それと、士。」

「何だ？」

「お前はここに残れ。戦略と一緒に練って欲しい。」

「わかった。」

どうやら士は残るらしい。

手を上げる雄二に背を向け、秀吉を追いかけて駆け出す。

｝side 明久 out ｝

｝side 士 ｝

俺は残ることになったので取り敢えず今後の作戦を聞くことにした。

「で、どうするんだ？」

「取り敢えず、壊れたものと空き教室の手配をして、そのときに鉄人にカメラを渡すつもりだ。」

「まて、カメラはまだ早い。」

「何故だ？」

「相手は根本だ。これだけであいつが終わらせるはずが無い。」

どう考えてもあんな嫌がらせをする為にあんな協定を結ぶはずが無い。絶対まだ何かある。

「あいつのことを知ってるのか？」

「ああ。あの屑とは3ヶ月だけ同じ中学にいた。」

「なんで3ヶ月なんだ？」

「それは放課後皆が集まったら言う。」

「そうか。なら、まだカメラの事は黙って手配だけするか。」

「ああ。」

その後、今後の戦略を考えてこの日は協定通り休戦となった。

……けど、何で明久が怪我してるんだ？

まあ、多分また余計なことでも言っつて島田を怒らしたんだろうな。
懲りない奴だな。

第13話 VS Bクラス 1日目 後編 (後書き)

作「次回、遂に土と根本の関係が明らかに!」

土「あんなこと、思い出したくもねえ…!」

作「でも、書くぞ。」

土「分かってる、あの日に比べりゃ……」

作「おっと、ネタバレ禁止だよ。」

土「おお。そうだったな。ということぞ、

作・土「次回をお楽しみに!」

第14話 最低な奴

今俺たちは、協定通り休戦となっている。

「戦況はどうなったの？」

明久が雄二と俺に聞く。

「ハプニングがあったが、今のところは順調だ。」

「ああ。だが、こちらの被害も少くない。」

「……………（トントン）。」

「お、ムツリーニか。何か変わったことはあったか？」

ムツリーニには、相手の動きを監視してもらってた。

「ん？Cクラスの様子が怪しいだろ？」

どうやらCクラスが試召戦争の用意を始めてとのこと。ということは、

「漁夫の利か。」

「ああ。いやらしい連中だな。」

ん？待てよ…

「雄二、どうするの？」

「んー、そうだなー。Cクラスと協定を結ぶか。Dクラスを使って攻め込ませるぞ、とか言っただけで脅してやれば俺たちに攻め込む気もなくなるだろ。」

「それに、僕らが勝つなんて思ってもいないだろうしね。」

もしかして……

「よし。それじゃ今から行ってくるか。」

「それだー!!」

「何だよ、士。」

「Bクラスとの協定の内容はなんだ、雄二？」

「何だよ急に。」

「いいから答えろ!」

「わ、分かった。たしか、戦争に関する一切の行動を禁止するだったか？」

「そうだ。多分、根本の狙いはこれだ。」

「どういうこと？」

「そうじゃ。どういふことなのじゃ？」

「戦争に関する一切の行動を禁止するだから今雄二が言った事は協定に違反する。」

「流石にそれは……」

「それをするのがあいつだ。」

そう、あの時も。

「わかった。その話を信じよう。皆もいいか？」

「「わかった。（のじゃ・わ・です）」」

「すまない、皆……」

「だが、中学の頃あいつと何があつた？それだけは教えてくれ。」

「ああ。あの頃もあいつは最低の奴だった。今回のような約束をして屁理屈を使い、あいつと一番親しい奴を裏切り、そいつを病院送りにした。クラスメートを使いリンチをしてな……。」

「そんな事をしたのか、あいつは。」

「許せん！」

「それで、根本はどうなったのじゃ？」

「クラスメートと一緒に嚴重注意をされた。その後、俺はそいつらに聞いたら、そいつらも脅されてやらなきゃ自分がやられると思つたからだったんだ。」

「最低な奴ね。」

「何で、嚴重注意だけなの？」

「中学だから、停学や退学はないんだ。」

「…根本、許すまじ…！」
「それで、お主はどうしたんじゃ？」

「根本と脅されてた訳じゃなく自分の意志で参加した奴をぶん殴った。けど、根本をぶん殴る前に先生に取り押さえられて殴れなかった。だから、転校した。あんな奴の顔など見たくも無いからな。」

ああ、思い出すだけで胸くそわりい…。

「そうか、嫌な事を思い出させてしまったな。」

「いや、いいんだ。その後聞いたんだが、中学にいる間はもうそんなことをしなくなったらしい。だが、高校に上がってまた悪事…まあ、少しはましになったみたいだが、それをし始めたのであれば今度は相手と同じ手段を使い根本をぶちのめすまでだ。」

「そうだね。でも、このままじゃ不味いんじゃない？」

「ああ、これではCクラスと連戦になってしまふ。」

「それなら、こっちにも考えがある。」

俺は、根本に対抗する手段を皆に話した。けど、

「Cクラスを牽制する方法が見つからねーんだ。」

根本に対抗するまではよかったんだけどな

「それなら俺に任せろ。」

「わかった。」

「それじゃ、秀吉はここに残ってくれ。」

「わかったのじゃ。」

「よし！皆、いくぞ！」

「…「おー！」」

雄二が言うとは皆は賛成してくれた。

「皆、ありがとう…！」

俺は、小さく呟いた。

さて、根本め、待ってるよ。

第14話 最低な奴 (後書き)

作「遂に来ました、根本との間に起こったこと。」

士「次は根本の驚く顔が見れるんだな？」

作「ああ。 それでは、

作・士「次回もお楽しみに！」

根本ファンの人、申し訳ありませんでした。

第15話 目には目を、齒には齒を

「Fクラス代表の坂本雄二だ。このクラスの代表は？」

教室の扉を開くなり、雄二がそこにいる全員に告げる。

「私だけど、何か用かしら？」

小山が出てきた。

「Fクラス代表としてクラス間交渉にきた。時間はあるか？」

「クラス間交渉？ ふうん……。」

気持ちの悪い笑みだな。

「ああ。不可侵条約を結びたい。」

「不可侵条約ねえ……。どうしようかしらね、根本クン？」

「当然却下。だって必要ないだろ？」

やはり、根本が絡んでたか。

「なぜ君たちがここにいるの？」

明久の質問。

「酷いじゃないかFクラ……。…だまれ。」 なつ、津上！？」

「何故お前がここにいる？ ことによつては、協定違反とみなすぞ。」

これが俺の作戦。逆に相手の作戦を利用するんだ。

「俺は友香と付き合ってるから当たり前だ。それより…」

「まだ俺の質問に答えてもらってない。お前はそれでも、何で彼女に会いに行くのに態々他のBクラスの連中を連れてくる必要がある。」

「

これは雄二。

相手に反撃させない、そうすれば必ず相手を打ち負かせられる。

「悪いかな？」

「ああ、ちゃんと答えてもらわなきゃ協定違反だ。それと、どうしてCクラスの担任でもないのに長谷川先生がいるんですか？」

上手く隠したつもりだろうが俺の前では無意味だ。

「根本君に呼ばれて…まさか！」

「これはどういうことなの？説明しなさい！」

「くっ、ここは引くぞ！」

「させません。先に協定違反をしたのはそっちなんですから。長谷川先生！」

「分かりました。許可します。」

「藤堂士が数学で根本以外のここに居るBクラスの生徒全員に挑みます！ サモン！！」

「くそっ！ サモン！」

「変身！」

『ヘンシン』

今回はカブトのようだ。

『Fクラス 藤堂士

VS

Bクラス×3

850点

634点

』

「いくぞ！」

『キャスト・オフ』

掛け声とともに”ライダーフォーム”になる。

「クナイガン！」

俺の召喚獣はソードモードで一体、ガンモードで一体倒した。

「うわぁ！」

残るは後一体。

「クロックアップ！」

『クロック・アップ』

すると、急に相手の動きが遅くなった。

「どうやら、俺の召喚獣のスピードに合わせるらしいな。」

「どういうこと?」

「後で説明する。これで終わりだ。」

相手の召喚獣を殴り上げ、カプトゼクターの横のボタンを押している。

『1・2・3』

カプトゼクターの角を逆にし、

「ライダー…キック」

また、元に戻る。

『ライダーキック』

エネルギーが一度頭の角に行き、右足に行く。

そして、回し蹴りの要領で落ちてきた召喚獣を蹴って爆死させる。

『Fクラス 藤堂士』

VS

Bクラス×3

730点

0点
『

「戦死者は補修!」

宗一が3人を連れて行く。

「じゃあ、用は済んだし、戻るか。」

雄二がそう言うが、

「先に言ってくれ。」

「どうした?」

「少し、根本に話がある。」

「わかった。先に行ってる。」

雄二たちには先に行つてもらった。

俺が話すことはさっきの名前のことだ。

「根本、俺の……いや、俺等の両親は死んだ。だからもう、津上じゃない。今は、祖母ちゃんの藤堂という名字を使わせてもらってる。だから、間違えるな。」

「そうか。クソツ、覚えてろよ！」

「一々覚えていられるほど俺は暇じゃない。じゃあな。」
俺はCクラスを後にした。

「お、来たか。」

教室に行くと言が待つててくれた。

「すまない。それと、これ、返すぞ。」

そう言つて盗聴器を返した。

「気づいてたのか？」

「ああ。どうせここで話すつもりだったんだ。その手間が省けた。」

「藤堂君。」

「なんだ、木下姉……いや、優子も来てたのか？」

「ええ。やっと、名前で呼んでくれたわね。」

「ああ。毎日言われればそうなるよ。」

「毎日言われてたんだ……」

「い、いいじゃない！ それより、辛いなの？」

「辛いというは嘘になる。けど、俺を必要としてくれる人がいたし、何より今はお前らが居る。だから……だから平気なんだ。」

「よかった。けど、一人で抱え込まないでね。」

「分かつてるって。」

「なあ。お前の言う『俺を必要としてくれる人』って誰だ？」

「妹の林檎だ。」

「そうか。で、根本は野放しにしているのか？」

ああ、そのことか。

「大丈夫。あいつは今頃、

「「「異端者には死の鉄槌を！」」「」

「ぎゃあああ！」

ってなってるから。」

Ｃクラスについてからずっと録音しておいて、さっき帰る時に須川たちに小山と根本が付き合ってるという情報を流しておいたのだ。

「最後までやるんだね。」

「当たり前だ、詰めを甘くするとかえって嘗められる。」

「まあ、土の言うことにも一理あるぞい。」

「そうだな。じゃあ、帰るか。今日はこれで解散！」

「「「お疲れ様でした。」」「」

その後、皆で帰った。

明日で全てが決まる、頑張らなきゃな。

第15話 目には目を、歯には歯を (後書き)

作「どうでしたか？」

士「林檎って…」

作「生徒会の一存に感化されました！」

士「おい…。つーか数学以外でも戦わせろよ。」

作「大丈夫、次は物理を使うから。」

士「なら良いんだが…。」

第16話　演劇バカの実力

「昨日言ってた作戦を実行する。」

翌朝、登校した俺らに雄二は開口一番に言った。

「作戦？Cクラスにか？」

「ああ。そうだ。」

そういえば、昨日、雄二に任せたな。

「それで、何をするの？」

「秀吉にコイツを着てもらおう。」

そういつて雄二は鞆からウチの制服を取り出した。

まさかそれって……

「それは別にかまわんが、ワシが女装してどうするんじゃ？」

「気にしろ……。そんなんだから女扱いされるんじゃないのか？」

「そうなのか、雄二？」

「……と、とにかく！秀吉には木下優子として、Aクラスの使者を装ってもらおう。」

「やっぱり……」

「気づいておったのか？」

「お前は女装させられるっていう時点で気づけよ……。」
後で優子に謝んなきゃな。

「と、いうわけで秀吉。用意してくれ。」

「う、うむ……。」

雄二から制服を受け取り、その場で生着替えを始める秀吉。
？何でこいつら期待してるような表情してるんだ？

「……………！！（パシャパシャパシャパシャ！）」

康太はシャッターが擦り切れるんじゃないかと思うほど凄い速さでシャッターを切る。

「康太、連写ならこのカメラを使い。っーかこれやるよ。」

「……………すまない。」

「お前もそういう趣味があったのか？」

秀吉の着替えの前で唯一取り乱していない雄二が聞いてくる。

「いや、流石にアレを見てると哀れに思えてくるんだ。」

だって、あそこまでマジになられると逆に哀れに思えてくるよな。

「それについては同感だ。」

「よし、着替え終わったぞい。ん？皆どうした？」

着替え終わった秀吉が皆を見てそう言った

「さあな？俺にもよく分かん」

見た目が女だからじゃないのか？

「おかしな連中じゃのう。」

おかしいのはお前だ。

「んじゃ、Cクラスに行くぞ。」

「ああ。」

「うむ。」

「あ、僕も行くよ。」

明久が慌てて付いて来る。

にしても、無駄の多い構造だな。こんなにスペースがあるなら空き教室でも作ればいいのに。

そにまま暫く歩き、Cクラスを前にして立ち止まる俺ら。

「さて、ここからは済まないが一人で頼むぞ、秀吉。」

Aクラスからの使者に成りすます以上、俺らが同行するのは不味い。

「気が進まんのう……。」

俺だって出来れば避けたい。でも、しかたないことだ。怒られる覚悟は出来ている。

「悪いな。とにかくあいつらを挑発して、Aクラスに敵意を抱くよう仕向けてくれ。お前なら出来るはずだ。」

「はあ……。あまり期待はせんでくれよ。」

気が重い……。でもこいつは、

「雄二、秀吉は大丈夫なの？」

「多分大丈夫だ。」

「演劇部のホープを嘗めるな。」

「シッ。秀吉が教室に入るぞ。」

ガラガラガラ。

どうやら秀吉は教室に入ったようだな。

『静かにしなさい、この薄汚い豚ども！』

「流石だな、秀吉。」

「うん。これ以上ない挑発だね……。」

「……あのバカ、何してんだよ……！？」

何で、優等生の、優子じゃなくて、普段の、優子を演じるんだよ！？

……今度何か奢ってやるか……。

『な、何よアンタ！』

『話しかけないで！豚臭いわ！』

いくら優子でもこんなこと言わないぞ！？

あいつ、日頃の恨みでもあんのか？

『アンタ、Aクラスの木下ね？ちよつと点数良いからっていい気になってるんじゃないわよ！何のようよ！』

『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢できないの！ちようど試召戦争の準備もしているようだし、覚悟しておきなさい。近いうちに私達が薄汚い貴方たちを始末してあげるから！』

そついい残し、靴音を立てながら秀吉は教室を出た。

「これで良かったかのう？」

どこかスッキリした顔で秀吉が近づいてくる。って、コイツぜったい日頃の恨みもあるだろ！

「ああ。素晴らしい仕事だった。」

「ああ、素晴らしい仕事だった。本人に本格指導されるんじゃないかね？」

「……あつ！」

俺にそう言われ、思い出したかのように顔を青くする秀吉。

「どうしたの、秀吉？」

「明久、あいつは今度、優子とハートフル・コミュニケーションなんだ。」

「どういうこと？」

「いずれ分かるさ。」

『Fクラスなんて相手にしてられないわ！Aクラス戦の準備を始めるわよ！』

すまん、優子。今度言うこと聞いてやるから許してくれ。

「作戦も上手くいったことだし、俺達もBクラス戦の準備を始めるぞ。」

「ああ。」

「う、うん。」

「う、うむ。」

取り敢えず今は目の前のBクラス戦だ。
出来るだけ頑張ろう。

第17話 風都を守るライダー

あの後午前九時よりBクラス戦が開始される。

「ドアと壁を上手く使うんじゃ！戦線を拡大されるでないぞ！」

秀吉の指示が飛ぶ。

雄二の作戦は”敵を教室内に閉じ込める”というものだった。

しかし、ここで問題が起きた。本来、総司令官である姫路が一向に指示を出さない。

それどころか何にも参加しない様にしている。何かあったんだろうか？

「勝負は極力単教科で挑むのじゃ！補給も念入りに行え！」

そんなわけで今指揮を執ってるのは副指令の秀吉。

「姫路さん、どうかしたの？」

明久が姫路に聞く。

何かあったみたいだが大丈夫なのか？

「そ、その、なんでもないですつ。」

いくらなんでも嘘が下手すぎる。

「嘘をつくな。何かあるならはっきり言え。出れないなら出れないと言え、別に理由を聞く気は無い。それ次第で作戦が大きく変わるんだ。」

「ほ、本当になんでもないんです！」

いくら口ではそう言えても、泣きそうな顔は相変わらずだ。

「右側出入り口、教科が現国に変更されました！」

「数学教師はどうした！」

「Bクラス内に拉致されました！」

くっ、両方の扉が文系に変更されると、結構ピンチだ！

「私が行きますつ！」

そう言い姫路が戦線に加わろうと駆け出した。が、

「あつ……。」

急にある一点を見て動きを止めてしまった。
その方向を目で追ってみる。すると、

「っっ！！」

ラブレターらしきものを持った根本がいた。
おそらく姫路の物だろう。

「……なるほどね。そういうことか。」

どうやら、明久も秀吉も気づいたようだ。

「「姫路。」」

「は、はい……？」

「具合が悪そうだからあまり戦線には加わらないように。」

「試召戦争はこれで終わりじゃないのじゃ。」

「体調管理、気をつけろよ。」

「…はい。」

「じゃ、僕は用があるからいくね。」

「ああ、こっちは俺等に任せろ。」

「あ……！」

そう言っ明久は駆け出した。

「面白い事してくれるじゃねーか。」

「うむ、真に面白いのう。」

「あ、あの……？」

姫路が何か言ってるが気にしない。

「「あの野郎……！！ぶち殺す（のじゃ）。」」

「すみません、二人とも。」

そう言っ頭を下げる姫路。

「いいや、お主は悪くないのじゃ。」

「ああ。だから、あっちでゆっくり俺等が勝つのを楽しみにしててくれ。」

「は、はいっ！ありがとうございます！」

そう言っ少し離れていく。

「なあ。」

「なんじゃ？」

俺はその時気づいた。こいつとならアレが出来る気がする、と。

「悪魔と相乗りする勇氣、お前にはあるか？」

「二人とも！」

「「なんだ（じゃ）、雄二」」

「午後三時に作戦を実行する。」

「「了解！」」

雄二が驚いた顔をする。

「お前ら、何かあったのか？」

そう聞いてくる。

「ああ、改めてあいつの最低さを再確認したところだ。」

「そうか、じゃあ、頼むぞ！二人とも！」

「「ああ。」」

そういい、俺らは駆け出した。

「「Fクラス藤堂士と木下秀吉が現国でここに居るBクラス全員に挑む！サモン！」」

「「「サモン」「」「」」

『 Fクラス

V S

Bクラス

藤堂士&木下秀吉

Bクラス

× 4

4 3 7 & 1 1 6 点

合計 1 0

3 7 点
』

「「「「なにい！？」「」「」」

「今回は教科書を台本代わりに読んでおったんじゃよ。」

さすが、演劇部のホープだな。

「じゃあ、いくぜ。相棒。」

「うむ！」

そう言うと、秀吉が、サイクロン、メモリ、俺が、ジョーカー、メモリを取り出し、

『サイクロン！』

『ジョーカー！』

「変身！」

そう言うと秀吉の召喚獣が消え、代わりに俺の召喚獣のベルトにサイクロンメモリがセットされる。そして、ジョーかメモリをもう片方のトリガーにいれ、ベルトを左右に開く。すると、

『サイクロン！ ジョーカー！』

俺の召喚獣が風に包まれ、仮面ライダーダブルとなった。

「さあ、お前の罪を数えろ！」

第18話　さあ、お前の罪を数えろ！

「さあ、お前の罪を数えろ！」

そう言つとWを敵に飛び込ませていった

「うわぁ！」

「きゃぁ！」

2体の召喚獣同士をぶつけて遠くに飛ばす。

あれ？　そういえば…

「何で秀吉がW知つてんだ？」

「この前姉上と一緒にいつきに見させられてのう。」

「なるほど。でも何であいつが見たがつたんだ？」

「姉上に聞いて欲しいのじゃ。」

「わかった。」

仕方ない。後で聞くか。

「無視するんじゃないか！」

焦れた相手が突進してくる。が、

「何で当たらないんだ！？」

当たり前だ。

「俺らは一つの召喚獣を二人で操つてんだ。一人のときより難しい技も出来る。」

「メモリを代えぬか？」

「そうだな。」

他の力も試したいしな。

『ルナ！』

『トリガー！』

今度は、ルナ、メモリと、トリガー、メモリを使い”ルナトリガ

―” になった。

「んじゃ、いくぜ！」

「うむ！」

トリガーマグナムでさっき飛ばした2体の召喚獣を打ち抜く。

「どんだん行くぞ！」

『ヒート！』

『メタル！』

今度は”ヒートメタル”となり、メタルシャフトを取り出した。

「いくのじゃ！」

また1体突き刺して倒した。

「くつ、こうなりやヤケクソだ！」

最後の1体が突進してきたがそれをかわし

「これで終わらせるぞ！」

「わかったのじゃ！」

『サイクロン！』

『ジョーカー！』

また”サイクロンジョーカー”になり、

「これで最後だ！」

『ジョーカー！ マキシマムドライブ！』

「ジョーカーエクストリーム！！！」

「え？うわああ！」

『Fクラス

V S

藤堂士&木下秀吉

Bクラス

Bクラス

×4

385&86点

点
』

0

「じゃ、教室に入るぞ。」

「うむ。」

俺らは雄二と逆の扉から教室に入った。

ドン、ドン、……

何だ？

『さつきからドンドンと壁がうるせえな。何かやっているのか？』

「いたぞ、根本だ。」

「うむ。じゃが、どうするのじゃ？」

「さあ、何とかして近衛部隊の気を引かねーと。幸い、数学だから
'フアングジョーカー' 使えるぞ。」

「本当か？」

「ああ。合わせて900点以上取ればいいんだからな。ちなみに
俺はまた問題数が増えたおかげで870点取れたぞ。」

「ワシは76点じゃ。」

「ならいけるだろ？」

「うむ。」

『どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか！』

『後はまかせたぞ、明久。』

？どういう…

「だああーっしやーっ！ー！ー！」

ドゴオッ！ー！ー！

その音と同時に壁が崩れる。

ずいぶん思い切った行動に出たな……。

「ンなっ!?!」

「くたばれ、根本恭二いーっ!」
明久が叫ぶ。

「長谷川先生! Fクラス島田が――」

「Bクラス山本が受けます! サモン!」

「くっ! 近衛部隊か!」

そろそろ、出番だな。

「Fクラス藤堂と木下も戦います。サモン。」

「ならアンタ達に任せるわ!」

「任された!」

『 Fクラス

V S

Bクラス

藤堂&木下

山本

870 & 76点

168

点
』

「変身!」

『 サイクロン!』

『 ジョーカー!』

「えっ? 二人でなれるの?」

「ああ、Wだな。」

「それじゃあ、いくのじゃ!」

「ああ。」

「フアング!」

俺達が叫ぶと、

『 ギャオオオ!』

ファンゲメモリがやってきて俺等の変身が解ける。
あれ？

「…なあ、わざわざ最初に変身する必要なくね？」

「そういえば、そうじゃな。」

「まあ、いいか。んじゃ、いくぞ！」

「うむ！」

『ファンゲ！』

『ジョーカー！』

今度は俺の召喚獣が消えてW”ファンゲジョーカー”になった。

「ハアアア！」

『アームファンゲ！』

腕に鎌のようなものが出てきて、それで相手を切り裂く。

「まあ、俺らは。」

「ただの時間稼ぎなんじゃがな。」

「は？どういう……」

ダン、ダンッ！

「来たか。」

「こつちも終わらせるぞい。」

「ああ。」

『ファンゲ！ マキシマムドライブ！』

「「ファンゲストライザー！！」」

ドオン！

『Fクラス

V S

Bクラス

藤堂&木下

820&56点

山本

0点

㊦

終わったな。あつと、言い忘れてた。

「ムツツリイニイーンッ！」

「恭二、もう詰んでんだよ。」

㊦ Fクラス

土屋康太

VS

Bクラス

根本恭二

441点

VS

203点

㊦

康太の召喚獣は手にした小太刀を一閃し、一撃で敵を切り捨てる。

これにてBクラス対FクラスはFクラスの勝利で幕を閉じた。

第18話　さあ、お前の罪を数えろ！　（後書き）

士「やっと終わった。」

作「小学校の頃の根元の過去をそのうち書くつもりだから…」

作「って、きいてるのか!？」

士「あ、ああ。」

作「どうせ、優子の事でも考えてたんだろ？」

士「う、うるせえ!」

作「ぐはっ!」

士「はっ、しまった!作者が気絶しちゃった。」

士「え、えっと。作者が気絶してしまったので今日はここまでです。」

第19話　人って考え方一つで変わるよね

「明久、随分と思い切った行動に出たのう。」

終戦後、拳をおさえている明久に秀吉が言った。

「うう……。痛いよう、痛いよう……。」

「当たり前だ。100%返ってくるわけじゃないとは言え、素手で壁を壊したんだ。普通だったらこんなんじゃ済まない。」

「なんとも……。お主らしい作戦じゃったな。」

「ああ。後の事も考えずに自分の立場を追い詰める、男らしい作戦だな。」

「……遠まわしに馬鹿って言ってるじゃない？」

「さあな。まあ、どの道、後で宗一とハートフルコミュニケーションだしな。」

「うう……。そうだったよ。」

初犯でなけりや停学か、下手すりや退学ものだからな。

「ま、それが明久の強みだからな。」

雄二が明久の肩を叩く。

雄二。それは堂々と、お前は馬鹿な所が強みだと言ってる様なものだぞ。

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組み代表？」

「……。」

さっきまでの強気が無くなった恭二。

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない。」

そんな雄二の言葉に、ざわざわと周囲が騒ぎ始める。つつたく…

「お前ら、俺等の目的は何だ？言ってみろ。」

「「打倒Aクラスであります！」」

「だったらこんな教室を譲り受ける必要が無い、違うか？」

「Yes my princess!」

「そう、ここはあくまで通過点だ。だからBクラスが条件を呑めば開放してやろうかと思う。」

少しは感謝しろよ。

「……条件は何だ」

「2つある。」

そこに俺が入る。

「まず一つ目。俺等のクラスの卓袱台の修繕費と、壊したシャープン、消しゴム代をBクラスに払ってもらう。」

「ふざけるな！」

Bクラスの生徒の一人が怒鳴ってくる。

ん？あいつは……

「ああ、犯人の一人か。」

「は？何の根拠があつてそんな事が言えるんだ？」

「そうだ、証拠があるのか、士？」

宗一が聞いてくる。

「証拠ならある。このカメラだ。」

そういつて俺が取り出したのは教室を空けるときに仕組んだカメラだ。

「これを見る。」

それを再生したのを宗一に見せる。

それと同時に、さっきの奴の顔色がどんどん悪くなっていく。

「……わかった。後、お前らもみっちり補習してやるから覚悟しておけ。」

「ぎゃああー！」

Bクラスの生徒が数人連れて行かれる。下らん事をするからだ。さて、

「恭二、お前がこういうことをするのはやっぱりあの事が原因か？」

「ああ。あの日は俺は知ったんだ。いくら正しい事しても、それは報われない。寧ろ裏切られるんだ。」

皆が息を呑む。恐らく、このことを何一つ知らずにただの屑だと思
ってたんだろうな。

「確かに、雄介兄さんは正しい事をしたのに周りに責められ大怪我
をした。」

「ああ。だから、俺は勝つためならどんな手を使ってでも勝つと決
めたんだ。お前らだって同じじゃないか！」

お前のいいいたいことも分かる。だから、多少のことは目を瞑ってき
たんだ。でも、

「確かに、勝利は大事だ。でも、人の『想い』や、お前自身の人と
しての心を犠牲にしてまで得なければならぬものなのか？」

「そ、それは……。」

「違っただろ？俺らにとって大事なもの、それは何だったか思い出し
てみる。お前は兄さんの何を見ていたんだ？」

「……そうだったな。勝負で卑怯な手を使ったとしても、絶対に人
の『想い』を踏みにじらない。」

「そうだ。それを踏みにじった先にあるのは、『虚しさ』だけだ。」

「すまない、土。俺はとんでもない事をしてしまったんだ。」

「だが、反省だけじゃ

「ああ、俺はどんな罪でも受け入れるさ。それで俺の罪を償う。そ
うじゃなきゃ、あの人に顔向けできない。」

「そうだな。じゃあ、雄二。」

「な、なんだ？」

「そこまで慌てなくても……」

「後は、お前の好きなように、煮るなり焼くなりしてやってやれ。」

「いいのか？」

「言いよどむ雄二。」

「ああ。あいつの気持ちも分かってやってくれ。」

「わかった。」

「じゃあ、俺は教室で待ってるよ。」

「いいのか？」

「ああ。後はあいつ次第だ。それじゃ。」
そう言つて俺は教室を出た。
あ、小便しよう。

「アレで良いのか？」

便所から出ると秀吉と優子が居てそんな事を聞いてきた。

「ああ。というか、俺があいつにしてやれる事はここまです。全部してやってはあいつのためにならん。」

「そうか。お主とあやつは中学で知り合つたのではないのか？」

「ああ。さっきまでの『根本』とはな。でも、ああなる前の『根本恭二』とは小学校が同じで友達だつたからな。」

「つまり、さっき言つてたことがあつたから根本君はあんな性格になつちやつたのね？」

「ああ。」

「ふーん。」

「そろそろ教室に戻ろうぜ。」

「うむ。」

「アタシは今日お母さんに家の手伝いをしろって言われたから先に帰るわね。」

「「わかつた（のじゃ）。」「」

そこで優子とは別れて教室に戻つた。

教室ではさつきと同じ説明を雄二たちにした。
その後、皆でカラオケに行く事になった。

第19話　人って考え方一つで変わるよね（後書き）

作「久々の投稿だー！」

士「今週末に英検だろ？」

作「ああ。けど、たまには投稿したくなるんだよ。」

士「つーか、最初は恭二の役割違う方向だったよな？」

作「ボツコボコにしてやろうと思ったんだが、なんか閃いてな。」

士「また、オリキャラ出てきたな。」

作「そのうち、同年代のオリキャラも出すつもりだよ。」

士「どんどん原作からかけ離れていくな。」

作「大丈夫、話の流れは変えないから。」

士「そうしてくれ……」

何か臭いなこの台詞

第21話、幼馴染って欲しいよね（前書き）

久々の投稿です。

第21話　幼馴染って欲しいよね

Bクラスに勝利し、補給テストを終えた二日後の朝。

後はAクラス戦だけだ。

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われているにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があったの事だ。感謝している。」

珍しいな、明日は雨か？」

「口に出ておるぞ。」

あ、やべっ

「でも、雄二らしくないよ？」

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ。」
「そこまで言われると何か嬉しいな。」

「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突きつけるんだ！」

「おおーっ！」

「そうだーっ！」

「勉強だけじゃねえんだーっ！」

Bクラスに勝っただけでも十分証明出来ると思うんだが…

「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎討ちで決着をつけたいと考えている。」

「どういうことだ？」

「誰と誰が一騎討ちをするんだ？」

ざわめくクラス。

「落ち着いてくれ。それを今から説明する。」

雄二がバンバン、と机を叩いて皆を静まらせる。

「やるのは当然、俺と翔子だ。」

いくら元神童とはいえ、ブランクがあり過ぎじゃないのか？

明久が何か言おうとしている。

「馬鹿の雄二が勝てるわけなあっ!？」

明久の頬と額をカッターと鉛筆が掠める。

「次は耳だ。」

「ちよつと！何で士まで攻撃するのさ!？」

「当たり前だ。余計な事に時間を使いたくないからな。」

「酷っ!」

「まあ、明久の言うとおり確かに翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目は無いかもしれない。」

それだけで終わるなら戦わせねーぞ。

「だが、それはDクラスもBクラスも同じだっただろう？まともにやりあえば俺たちに勝ち目は無かった。」

でも、俺らは勝ってきた。

「今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺達の勝ち揺るがない。」

今までの戦争を勝利に導いてきた魔法の言葉。無理だと思っても誰も否定しない。

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今皆に見せてやる。」

「「「おおおーっ!」」」

全員が雄二を信じた瞬間だった。

「さて、具体的なやり方だが……一騎打ちではフィールドを限定するつもりだ。」

「フィールド？何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ。」

なるほど…

「ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は100点満点の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負とする。」

「大化の改新か？」

「ああ、何故知ってる？」

驚く雄二。まあ、当然の反応だがな。

「藤堂家と霧島家は友好関係にあるからそのくだりで知り合った。俺から見れば姉のような存在だ。」

「なるほどな。」

あ、そうだ。

「ちなみに、あの事も全部知ってるよ。あの人が自分から話してくれた。」

「そ、そうか…」

「ねえ、あの事って何？」

会話に入ってくる明久。けど…

「悪いが、これは俺の口から言っていていい事じゃないんだ。」

「そうなの？」

「と、とにかく、大化の改新だ。」

まだ、自分を許せないんだな…

「年号かの？」

「おつ。ビンゴだ秀吉。お前の言うとおり、その年号を問う問題が出たら、俺達の勝ちだ。」

明久が口パクで『鳴くよウグイス、大化の改新』ってやつてるよ。

「大化の改新が起きたのは、645

年。こんな簡単な問題は明久でも間違えない。」

明久が目を逸らした。

「ちなみに、794年は平安京、『鳴くよウグイス、平安京』だぞ、明久。」

「な、何でそんな事を聞くのさ？」

「俺は、『読唇術』が使える。」

皆が明久を哀れnder。

「…まあいい。翔子は絶対に大化の改新を間違える。これは確実だ。そうしたら俺達の勝ち。晴れてこの教室とはおさらばって寸法だ。」

「あの、坂本君。」

「ん？何だ姫路。」

「霧島さんとは、その……仲が良いんですか？」

雄二の死亡グラフが立ったな。

「ああ、アイツとは幼馴染だ。」

「総員、狙ええ！」

「なっ！？なぜ明久の号令で急に上履きを構える！？」

「黙れ、男の敵！Aクラスの前にキサマを殺す！」

「黙るのはお前だ。」

パコーン！

「いたっ！なにをするのさ！？」

当たり前だ。未来の兄を殺すわけにはいかないからな。

「馬鹿かお前ら。」

「士は羨ましくないの？」

「俺が好きなのは優子だけだ！」

パコーン！！

さつきより強めに叩く。

「お主、男じゃのう。」

「え……ああっ！」

ヤバイ、凄く恥ずかしい！

「この事は優子には言つなよ。そういうのは、そのうち自分で言うから！」

「う、うむ。分かったのじゃ。」

「と、とにかく。雄二を殺すのは後でも出来るが、Aクラスを倒すのは今しか出来ないんだ。分かったか？」

「Yes my princeess!!」

何とか誤魔化せた…。

「とにかく、俺と翔子は幼馴染で、小さい頃に間違えて嘘を教えて

いたんだ。

アイツは一度覚えた事は忘れない。だから今、学年トップの座に居る。

姉さんは授業より雄二に教わったことを優先するからな。

「俺はそれを利用してアイツに勝つ。そうしたら俺達の机は――」

「『システムデスクだ！』！』！』！』」

第21話　幼馴染って欲しいよね（後書き）

作「久しぶりだー！」

士「遅えよ。」

作「しゃーねーだろ。英検の勉強してて、今日試験だったんだから。」

士「じゃあ、次からは1日1話を最低ラインとして投稿するんだな？」

作「当たり前だ。それと、やっぱりやった方がいいのかな？」

士「バカテストか？」

作「ああ。」

士「なら聞けばいいだろ。読者に。」

作「そうだな。　という事で、」

作・士「ぜひ感想と一緒にバカテストについて送ってください。」

作・士「よろしくお願いしますー!!」

第22話 VS Aクラス 始動！

「一騎打ち？」

「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎打ちを申し込む。」

恒例の宣戦布告。

俺らは、主力メンバー（俺、明久、雄二、秀吉、康太、姫路、島田）で来ている。

最初っからこうすればよかったのに。

ちなみに、交渉の相手は優子。

…相変わらず外と中との差が激しいな。本性の一部はこいつらに知られてるっていうのに。

「何か失礼な事考えてたでしょう…？」

相変わらず勘がいいな。

「…気のせいだ。」

「まあ、いいわ。後で聞くから。」

駄目だ、誤魔化せてない。

「それで、何が狙いなの？」

仕切りなおす優子。

「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ。」

まあ、当然だな。

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせる事ができるのはありがたいけどね、だからといってわざわざリスクを冒す必要も無いかな。」

「賢明だな。」

「ところで、優子。」

話に入る俺。

「な、何よ？」

そう身構えられると少し落ち込むぞ…

「しっかりするのじゃ土。」

「ああ、すまない。で、Cクラスとの戦争はどーだった？」

「時間は取られたけど、それだけだったわよ。何の問題もなし。」
半日で終わらせたんだっけ？流石はAクラスだな。

「じゃあ、Bクラスとやりあう気はあるか？」

「Bクラスって……、昨日来ていたアノ……」

ん？何があつたんだ？

「根本は女装させられておつたんじゃ。」

恭二に何があつたんだ？

「よく分からんが……、恭二のクラスだ。幸い宣戦布告はされていないようだが、いつされるのかな？」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、三ヶ月の準備期間を取らないと戦争は出来ないはずよね？」

たしかに、泥沼化を防ぐ為に準備期間は存在する。
だが、

「対外的にはあの戦争は『和平協定にて終結』ってなってるから規約的にはまったく問題ない。ついでに言えば、Dクラスもそうだ。」
敢えて設備を入れ替えなかった理由でもある。

「……それって脅迫？」

「好きなように取れば良い。」

今は優子を困らせてでも、この交渉を通さなければならぬ。

「普段から十分困らせられてるわよ……」

あれ？そうだったっけ？

「うーん……わかったわ。何を企んでるのか知らないけど、代表が負けるなんてありえないからね。その提案つけるわ。」

「え？本当？」

驚く明久。

まあ、女装の代表のクラスと戦いたくはないだろうしな。

「でも、こつちからも提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて、そうね、5対5の一騎打ちで、先に3回勝ったほうの勝ち、っていうのなら受けて良いよ。」

「なるほど、まあ、これは戦争なんだし妥当な案だな。どうする、雄二？」

「そうだな…、その条件を呑んでも良い。」

予想通りの答えだが、皆、驚いているな。

「ホント？嬉しいな♪」

…ボンッ！

か、可愛い…。可愛すぎるだろ…。

「どうしたのじゃ、士？」

ニヤニヤしながら秀吉が聞いてくる。って

「ニヤニヤするなよ…。」

「ツツコミにいつもの覇気がないのう。」

だって、今は反則だろ？

（相当、姉上の笑顔が効いたんじゃない。）

（う、うるせえ！）

（小声で怒鳴るとはお主も器用じゃのう。）

小声で話す俺ら。

「けど、勝負する内容はこちらで決めさせて貰う。そのくらいのハ
ンデはあってもいいはずだ。」

「それとも、ハンデがあると俺等に勝てないのか？」
畳み掛ける俺。

「お主、変わり身早いのう…。」

秀吉が何か言ってるけど、気にしない。

「……受けても良い。」

「うわっ！」

「ひあああっ！？」

ビックリした…。変な声が出ちゃったよ、

「……雄二の提案を受けても良い。」

いつの間にか姉さんが近くに來ていた。

いつ気配を断つ方法を習ったんだ？

「あれ？代表。いいの？」

「……その代わり、条件がある。」

「いいよ。」

「ま、待つてよ士！せめて内容を聞いてからにしようよ。」

「必要ない。だって、

「どうせ、負けた方は勝った方の言う事を聞く、とかだろ？」

「……うん。」

「なあ、いいだろ。雄二。」

「じゃ、こうしよう？勝負内容は5つの内3つそっちに決めさせてあげる。2つはうちで決めさせて？」

「優子の妥協案。さあ、どうする雄二？」

「交渉成立だな。」

「条件を呑む雄二。」

「……勝負はいつ？」

「そうだな。10時からでいいか？」

「……わかった。」

「相変わらず静かなしやべり方だな。」

「よし。交渉成立だ。いったん教室に戻るぞ。」

「そうだね。皆にも報告しなくちゃならないからね。」

「Aクラスを後にする俺ら。そこに…」

「おつ、士。ちょうどいいところに。」

「恭二が来た。」

「どうした？」

「Aクラスに転入生が居るらしい。保健体育が得意という情報だ。」

「何でそんな事知ってるんだ？」

「鉄人に聞いたんだ。何かの役に立つかと思って。」

「そうか、名前は？」

「それは、会ってからの楽しみだ。きつと驚くぞ。」

「誰だろう？」

「分かった。楽しみにしてる。」

「ああ。じゃあな。」

そう言って恭二は去っていった。

「いい情報が来たな。」

「ああ。助かるな。」

「本当に改心したんだね。」

「元に戻っただけだろ。」

他愛の無い話をしながら教室に戻る。

俺等の戦争の終結はすぐそこまで迫っていた。

第22話〽VSAクラス 始動！〽（後書き）

作「tokki-さん。感想ありがとうございます！」

士「バカテストについてのアンケートの締め切りは6月20日までとさせていただきます。」

作「また、こうしたほうがいいとかいう事があれば、ぜひ言ってください。」

士「ちなみに、ディケイドについてや、最強フォームについては。」

作「清涼際で書くつもりなのでよろしくお願いします！」

第23話

「では、両名共準備は良いですか？」

立会いはAクラス担任で、学年主任の高橋先生。

「ああ。」

「……問題ない。」

一騎打ちの会場はAクラス。こっちの方が2倍位広いし当たり前だな。

「それでは1人目の方、どうぞ。」

「アタシから行くよっ。」

「ワシがやろっ。」

Aクラスが優子なのに対して、こっちは秀吉。
姉弟対決だ。

「ところでさ、秀吉。」

「なんじゃ？姉上。」

「Cクラスの小山さんって知ってる？」

「はて、誰じゃ？」

「……秀吉、骨は拾ってやる。」

「じゃーいいや。その代わり、ちょっとこっちに来てくれる？」

「うお？ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上？」

殺戮タイムの始まりだ。

『姉上、勝負は——どうしてワシの腕を掴む？』

『アンタ、Cクラスで何をしてくれたのかしら？どうしてアタシがCクラスの人達を豚呼ばわりしていることになっているのかなあ？』

『はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測して——』

『あ、姉上！ちがつ……！その間接はそっちには曲がらなっ……！』

刹那、秀吉の叫びが廊下に広がる。

秀吉……哀れなり。

「秀吉は急用が出来たから帰るってさっ。代わりの人を出してくれる？」

「じゃあ、土。頼んだぞ。」

「分かった。」

俺が代わりに出る事になった。

たしか、俺は数学と物理と英語が禁止だったっけ。

「教科は？」

「じゃあ、科学でいい？」

「OK。」

科学は……腕輪だったな。

「では、始めてください。」

「「サモンツ！」」

互いの召喚が表示される

「一つ聞いて良い？」

「何だ？」

「どうしてそんなにFクラスのために頑張れるの？」

「…前に、秀吉が言ってた。」

『そんな事より、早く戦えよ！』

焦れる外野たち。

でも、これは言いたい。

「夢っていうのはな、時々切なくなるけど、時々熱くなれるもの…らしい。」

静まり返るクラス。

一呼吸置いて言う。

「俺には夢は無い。けど、夢を守る事はできる。 打倒AクラスはFクラスの夢だ！」

前に秀吉に、何故夢を追い求める、って聞いた。俺にとって夢は『呪い』と同じだったから。

でも、秀吉はこう答えたんだ。

俺にとっちゃ凄いことなんだ。

だから…、だから守るんだ！

『Fクラス

藤堂士

VS

Aクラス

木下優子

413点

377点

』

「いくぞ！」 変身”、” 合体”！」

俺の召喚獣はファイズに変身した。

「あなたの気持ちは分かったわ。…でも、こっちも負けるわけには
いかないのよ！」

突っ込んでくる優子の召喚獣。俺はそれを流しながらパンチを食ら
わせようとした。…が。

スカッ！

フラッ…

「…えっ！？」

クラスの皆が驚く。空振った上に、フラ付いているのだ。

「何かよく分からないけど、チャンスね！」
「ぐうっ！」

優子に叩き込まれる。
クソッ…！

『	藤堂士	VS	木下優子
4	3点		173点
			』

こゝここまでか…
「諦めるな士！」

「頑張つて！」

「「頑張れ！」「」

皆の声が聞こえる。

「そ…そうだ。…ま…まだだ…！」

こんなところで負けてたまるかつ！

「ハアアアッ！」

バキッ！

ドゴォ！

畳み掛ける俺。

「これで終わりだ！」

『エクセレント』

ダンッ！

「ハアアアッ！ ダアッ！」

「え？ キャア！？」

『クリムゾンスマッシュ』が決まる。…が、俺も攻撃を受けすぎて戦死した。

『Fクラス 藤堂士

V S

Aクラス

木下優子

0点

0点

』

勝負は引き分けだ。

「す…済まない、皆。勝てなかった。」

俺はそういつてぶっ倒れた。

第23話（後書き）

作「どうでしたでしょうか？」

士「クリムさん。感想ありがとうございます。」

作「今回は描き方を少し変えたけど、読みやすかったでしょうか？」

士「今後もよろしく願います。」

作「意見や、質問があれば、何でも言っして下さい！」

第24話　俺と再会と最後の戦い

「っ……！」

「あつ。目が覚めた？」

「ああ。」

目が覚めたのはいいが、何で膝枕されてるんだ？

「気にしないで。」

「……いつも思うんだが、何でお前には考えてる事が筒抜けなんだ。」
「え？え、えつとそれは……」

顔を赤くして誤魔化す優子。可愛い。

つて、それより、

「今どうなってるんだ？」

「えつと、吉井君と美穂が戦って美穂が勝ったわよ。あと、姫路さんが久保君に勝ったわよ。」

「じゃあ、こっちは1勝1敗1分か。厳しいな。」

そう言って身体を起こそうとするが、何者かにまた倒される。
「つたく、何だよ？」

「土君はまだ優子の膝で寝てなきゃ駄目だよ。」

そう言ってきたのは工藤愛子だった。

……え？

「何で愛子がここに居るんだ？」

「親友との再会でまず言うのがそれなんだね……」

「当たり前だろ。お前、東北の方に引っ越したじゃん。」

「愛子は仕事の関係でまたここに帰ってきたんだ。」

「その時にカオルおばさんに会ってここを紹介されたんだ。」

「なるほど。……で、なんで恭二がいるんだ。」

「お前らの試召戦争で暇だからな。」

俺は納得したので、周りの状況を見る事にした。えーっと？

・島田に間接極められてる明久

・俺と優子の写真をシャッターが擦り切れんばかりに撮る康太

・俺と優子を見て悶え苦しんでる残りのFクラスの生徒達

「……何と言うか、カオスだな。」

「うん。そろそろ始めたいんだけどね。」

「なかなか静まらないのよ。」

「どうにかできるか？」

「簡単だ。宗一！」

「何だ？」

「あいつ等黙らせて。補修室に連れて行かれると戦争に影響が出るからやめてね。」

「……ハア……。分かった。」

宗一はそういつてFクラスを黙らせて言った。

「では、次の方どうぞ。」

高橋先生の合図で戦争が再開される。

「……………（スック）」

「じゃ、ボクが行こうかな。」

あつちは愛子。保健体育が得意な人同士の戦いだ。

「教科は何にしますか？」

「……………保健体育。」

やはり保健体育か。

「土屋君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだね？でも、ボクだつてかなり得意なんだよ？…………君と違って実技で、ね。」

…変わってねーな。

「そつちのキミ、吉井君だっけ？勉強苦手そうだし、保健体育で良かったらボクが教えてあげようか？もちろん実技で。」

明久の後ろに二人の鬼が居る。
さてさて、どうなる事やら。

「フツ。望むところ——」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、要らないのよ！」

「そうです！永遠に必要ありません！」

「……………」

「姫路に島田。明久が死ぬほど悲しそうな顔をしているんだが。」

本当に变つてねーな。

嬉しい事だよ。おほ

「どうしたの、土君？ボクに実技をおしえて欲しいの？」

「…冗談でもそんな事言わないでくれ。さっきから優子が怖いんだ。」

「じゃあ、何なの？」

「また、こうしてお前と会えて嬉しいんだ。俺にとっては家族以外で初めてできた繋がりだから。」

「恭二君も？」

「ああ。あつ、俺の始めでは好きな人にあげるって決めてるから、お前とはしないよ。」

「好きな人って、もしかして……」

「やっぱ分かるのかな？」

「態度に出てるのか？」

「そろそろ召喚を開始してください。」

「はい。サモンっと。」

「……………サモン。」

召喚獣が出てくる康太のは小太刀の二刀流、愛子のは巨大な斧。腕輪もしている。

「実践派と理論派どっちが強いか見せてあげるよ。」

腕輪の力で一気に片付けようとする愛子。康太も腕輪持つてるんだからあんな隙だらけの攻撃では負けるだろうな。

「それじゃ、バイバイ。ムッツリーニくん。」

「……………加速。」

「……………やっぱり。」

康太の召喚獣の腕輪が輝き、愛子の召喚獣を切る。たぶん、普通の

人には見えない速さだ。

「…………え？」

「……………加速、終了。」

康太が呟くと同時に、愛子の召喚獣が血を噴き出して倒れる。

『Fクラス	土屋康太	V S	Aクラス	工藤愛子
572点		V S		446点』

「やるな。」

「Bクラス戦の時は出来がイマイチだったらしいからな。」

「そのようだな。」

「そ、そんな……………！この、ボクが……………！」

まあ、昔から保健体育には自信があったみたいだからな、相当シヨツクなのだろう。

「これで、2対2・1分ですね。」

流石に焦ったか、高橋先生の表情に若干の変化があった。

「最後の一人どうぞ。」

「…………はい。」

「俺の出番だな。」

雄二対姉さん。俺としては少し複雑だ。

……………そうだ！

「なあ。」

「なんだ？」

「これに雄二が勝ったらAクラスはFクラスに1年間攻め込まないで欲しい。」

「何だよそれ？」

「何で俺等がそんな事聞かなければならないんだ！」

「その代わり！！」

シーンと静まり返る。

「雄二が勝てなかったらこっちの負けでいい。」

「……分かった。」

「いいだろう。」

ざわつくクラス達。もしこれで雄二が勝てなければどの道延長戦で負ける。

勝っても三カ月後に責められたらどうしようもないからな。

「教科は小学生レベルの日本史。方式は100点満点の上限ありだ！」

「わかりました。そうなると問題を用意しなければなりませんね。少しこのまま待っていてください。」

ざわつくAクラス。

注意力と集中力の勝負になるからだろう。

明久たちは雄二に激励をしていた。

「雄二、後は任せたよ。」

「ああ。負かされた。」

「……………（ブイ！）」

「お前の力には随分助けられた。感謝している。」

「……………（フツ）」

「坂本君、あのこと、教えてくれてありがとうございます。」

「ああ。明久の事が。気にするな。後は頑張れよ。」

「はいっ。」

そして俺のここに来る。

「お前は何か無いのか？」

「俺としては複雑な気分だからな。まあ、Fクラスの俺としては、何だ？」

「絶対に手を抜くな。本来のお前なら絶対に勝てるはずだ。」

「ああ。…で、もう一人のお前は？」

「姉さんの気持ちにちゃんと正面から向き合って欲しい。」

「ああ。考えとくよ。」

「では、最後の勝負、日本史を行います。坂本君と霧島さんは視聴室に向かってください。」

「じゃ、いつてくるか。」

「ああ。逝ってこい。」

「…漢字が違うぞ。」

「気にするな。」

戦場に行く雄二と姉さん。

「皆さんはここでもモニターを見ていてください。」

先生はそう言うが俺は教室を出て屋上に行く事にした。

「ちょっと、待ちなさいよ！」

「何で優子も付いてくるんだ？」

「何で勝手に出て行くのよ。」

「どうせ、雄二は負けるだろうから、終わる頃に戻る。」

「何で坂本君が負けると思うの？」

「アイツは元神童だが、勉強してないから悪知恵ばかり付いて必要な事が抜けてるんだ。」

「…そういうことね。」

俺らは適当に時間を潰し、教室に戻る。

そして、ディスプレイには、

《日本史勝負 限定テスト 100点満点》

《Aクラス 霧島翔子 97点》

VS

《Fクラス 坂本雄二 53点》

俺等のクラスの卓袱台がミカン箱になった。

第24話　俺と再会と最後の戦い　（後書き）

作「今回は結構長めです。」

士「やっとここまで来たな。」

作「後1話くらいで1巻分は終わるな。」

士「オリ話が入るのか？」

作「そのつもりだ。」

作・士「これからも、よろしくお願いします!!」

第25話　俺と宗一と戦後会談

「坂本君が負けましたので、Aクラスの勝利です。」

俺らは完膚なきまでに負けてしまった。
分かっていても結構つらいな。

「……雄二、私の勝ち。」

「……殺せ。」

「良い覚悟だ、殺してやる！歯を食い縛れ！」

「やつちゃって良いよねえ？」

「坂本、覚悟オ！」

「……………やめておけ。」

「明久君、落ち着いてください！」

「アンタ達もやめなさい！」

「…アホかお前ら。」

「士は雄二を許せるの？」

「じゃあ、今、雄二を殺そうとした奴らの中にこのテストで100
点取れる奴は居んのか？」

「………そ、それは。」

「じゃあ、お前らに雄二を責める権利はねえ。違うか？」

「……すみません！！！！」

俺に土下座する皆。

「つたく、次こんなことしたら補修室に連行な。」

「……はいいい！！！！」

つたく、余計な事をするからだ。

「……ところで、約束。」

姉さんが雄二の下に来る。

たしか、勝った方が負けた奴に命令できるんだっけ？

「分かってる。何でも言え。」

「……それじゃ——」

姉さんが小さく息を吸って

「……雄二、私と付き合って。」

やっぱりな。まあ、これは姉さんにとって大切な事だからな。
ん？何で皆固まってるんだ？

「代表は、レズって言う噂があつたのっよ。」

「なるほど。まあ実際は、雄二を想う気持ちが強かつただけなんだ
がな。」

もう突っ込まないぞ。

「……私には雄二しかない。他の人なんて、興味ない。」

熱烈な告白。

一途でいいな。

「拒否権は？」

「……ない。約束だから。今からデートに行く。」

「ぐあっ！放せ！やっぱこの約束は無かつた事に——」

ぐいつ　つかつかつか

姉さんが雄二の首根っこを掴んで……って――

「姉さん、ストップ！雄二が死んじゃう！」

「……あつ。」

「それと、このスタンガンは要らないよ。逃げられなくなかったら腕を組めばいいじゃん。」

「……そっか。」

「おい、土！俺を助けてくれ！」

「いやだ。これを機に姉さんと、何より自分と向き合え。」

「……くつ。」

「……じゃあ、行ってくる。」

「いつてらー。」

姉さんと雄二は退場。

「さて、Fクラスの皆。お遊びの時間は終わりだ。」

「あれ？西村先生。僕らに何か用ですか？」

「ああ。今から我がFクラスに補修についての説明をしようと思つてな。」

宗一がFクラスの担任になるんだろうか。

「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から俺に担任が変わるそうだ。これから一年、死に物狂いで勉強できるぞ。」

「……なにい！？」「」

「いいか。確かにお前らは良くやった。Fクラスがここまでやることは正直思わなかった。でもな、いくら、『学力がすべてではない』」

とは言っても、ないがしろにしているものじゃない。」

宗一の言う事は正しい。

それに、宗一の方が授業も分かりやすいしな。

「吉井。お前と坂本は念入りに監視してやる。なにせ、開校以来初の《観察処分者》とA級戦犯だからな。」

「そうはいきませんよ！何としても監視の目をかいくぐって、今まで通り楽しい学園生活を過ごしてみせます！」

「少しは悔い改めろ、バカ久。」

「とりあえず明日から授業とは別に補修の時間を2時間設けてやる。」

2時間か。家で勉強する分を学校でやるってことだから特に問題は無いな。

明久に島田が近寄る。

「さあゝて、アキ。補修は明日からみたいだし、今日は約束通りクレープでも食べに行きましょうか。」

「え？それって週末って話じゃ——」

「だ、ダメです！吉井君は私と映画を観に行くんです！」

「ええっ！？姫持さん、それは話題にすら上がってないよ！？」

姫路も参戦。両手に花だな。

何で、俺は優子に睨まれてんだ？今日3回目だぞ？

「に、西村先生！明日からとは言わず、補修は今日からやりましょう！思い立ったが仏滅です！」

「『吉井』だ、バカ。」

「そんなことどうでもいいですから！」

「うーん、お前にやる気が出たのは嬉しいが――」

「今日は楽しんで来い、鈍久。」

「おのれ鉄人！僕が苦行にいると知った上での狼藉だな！こうなったら卒業式には伝説の木下で釘バットを持って貴様を待つ！」

「斬新な告白だな、オイ。」

「釘バットじゃ宗一はおろか、俺にすら勝てねえよ。」

「ほら、早くクレープ食べに行くわよ！」

「わ、私と映画に行くんですよね！」

流石に可哀相だ。

仕方ない、

（1万やる、これで何とかしろ。お前はともかく、二人を悲しませたくは無いだろ？）

（さりげなく罵倒された気がするけど、ありがとう！）

2人にばれないように1万円を明久に渡す。

そして、教室を出て行く3人。

…あれ？

「宗一、何で俺ぶっ倒れたんだ？」

「本来、吉井がやる仕事をアイツが逃げるせいでお前がやってたから、多分、過労だろう。今日は好きなように過ごせ。」

「さんきゅー。明久には俺から言っておくよ。」

「ああ。頼む。」

さて、秀吉を介抱してから帰るか。

「ねえ、士。」

「何だ、優子。」

「負けた方は言う事聞くんでしょう？」

「そうだが、何で？」

「Aクラスが勝ったんだから、これから映画を見に行きましょう。」

「別にいいけど、秀吉を介抱してからな。」

「分かったわ。」

そして俺と優子は近くにある映画館に行く事になった。

……あれ？

約束って1対1の結果じゃなかったっけ？

第25話　俺と宗一と戦後会談（後書き）

作「一卷分、終了！」

士「長かったな。」

作「ああ。次はデートの話です。」

士「その後、オリ話か？」

作「ああ。ということで、

作・士「次回をお楽しみに！」

投票の経過

・バカテストをやるべきである

1票

・しなくても良い

0票

です。

ぜひ、投票お願いします。

第26話『秀吉の想い』(前書き)

今回は、短めです。

第26話　秀吉の想い

「…で、何を見るんだ？」

今俺等が居るのは映画館。

上映されてるのは、『仮面ライダーOOO&W　FAST・スカル
ムービー対戦CORE』と、アレは…

「何で、3時間24分のと仮面ライダーしかねーんだよ。」

「仕方ないわよ。小さい映画館なんだから。」

「チケット代に、コーラにポップコーン。映画館、何と言う恐ろしい所！」

「明久たちも此処か。まあ、映画といっても此処しかないから当たり前か。」

「あ、士たちも来てたんだ。」

「俺らも？」

「じゃあ、他にも来てるのかの？」

「うん、さっき雄二たちがこれを2回見るって。」

そういつて明久が指したのは3時間24分の映画。

「…2回って、雄二は抵抗したのか？」

「うん。でも、腕を組まれてたから逃げられなかったよ。」

「そうか…。」

まあ、腕を組まれてたら当たり前か。

「じゃあ、俺らはこれにするか？」

「他に選択肢がないから仕方ないね。」

俺らは、仮面ライダーの映画を見ることにした。

「結構面白かっただろ？」

「そうね、アタシは〇〇〇の話が面白かったわ。」

「私事です。」

「ウチも。」

「ワシはWの方じゃのう。」

「僕は両方とも面白かったよ。」

「楽しんでもらえて何よりだ。」

俺らはその後、近くの喫茶店に行った。

「どうせなら、男女別で話さない？」

「そうだな、秀吉にも明久にも聞きたいことがあるし、皆はいいか？」

優子の提案で、男女別々のテーブルで話すことにした。

「で、どうなんだ？明久。」

「どうって？」

「お前は二人の事をどう思ってるんだ？」

「普通に友達だと思ってるけど……どうして？」

「だって、秀吉。お前、島田の事好きだろ？」

「ふえっ！？ち、違うぞ！？」

「慌てすぎだろ……」

此処まであからさまだと逆に凄いな。

「で、どうなんだ？」

「何故分かったのじゃ？」

「えっ？じゃあ、ホントなの？」

「う、うむ。（／＼／＼）」

「長年の勘って奴だ。俺はいろんな人間を見てきたからな。」

「でも、美波のどこがいいの？」

「ぜ、全部なのじゃ。」

「いつからだ？」

「一目惚れだったのじゃ。」

「じゃあ、１年間ずっとってこと？」

「うむ。」

じゃあ、島田が明久の事を好きだと知ってからずっと、その気持ちに蓋をしていたのかよ。

「俺は、応援するぞ。」

「僕も。」

「ありがとうなのじゃ、２人共！」

俺らはこうして親交を深めていった。

その後、清水に襲われるなどあったが、楽しく過ごせた。

EX1 バカと秀吉と召喚獣

「何のようだ、祖母さん。」

「おお、二人とも来たかい。じゃあ、これを見るさね。」

俺らは、学校に来るとすぐに宗一に学園長室に連れてこられた。えっと、これは……

「何なのじゃ？」

「お前の召喚獣のデータだ。」

「そうさね。どうやら、土とWになったせいで木下弟の方にも影響を与えてしまったみたいさね。」

「で、どんな影響が現れておるのかの？」

「お前のは、自分の意志で変身できるようになったらしい。」

「ライダーにか？それじゃ、ワシの召喚獣も弱くなっておるのか？」

「いや、お前のは俺の劣化版らしい。だから、召喚獣が弱くならないし、強くもならない。」

「しかも、変身できるのも限られてるさね。」

「サブライダーかの？」

「察しがいいな。平成はそうだが、昭和は2号とライダーマン、シヤドームーンになれるらしい。」

「二人に頼みたいのは……」

「データ集め。」

「そうさね、先生相手と戦うのはアレだから、Fクラスの奴らを数人呼びな。」

「分かった。」

俺等が呼んだのは、いつものメンバー+優子と姉さんと愛子だ。

皆に来て貰って、事情を説明した上で頼んだら快く受けてくれた。

「で、お前らと戦えばいいのか？」

これは雄二。

「ああ。だが、戦死は避けたいだろうから、点数は無しにする。もちろん、俺らもだ。」

「そんな事が出来るの？」

「ああ。でも、お前のフィードバックは直さないぞ。」

「何で？」

「お前が觀察処分者の仕事をサボると俺の負担が増えるからだよ。」
「えっ？じゃあ、あの時は……。」

皆が明久のほうをバカを見るような目で見ると、
まあ、実際バカだから仕方ないけど。

「やめて！皆で僕を見ないで！」

「下らない事やってないで早くするぞ。授業がサボれるからってこんな調子じゃ明日までかかるぞ。」

「もともとアンタから始まったのよ……。」

あれ、そうだったけ？

「まあ、いいや。じゃあ、始めようか？」

「「「おう！」」」

「承認する！」

「いつの間に宗一が来てたの？…っと、サモン！」
「「「サモン！」」」」

『藤堂士&木下秀吉 VS Fクラス主要メンバー&木下優子&霧島翔子&工藤愛子』

点数無し

VS

点数無し

』

「「俺らの扱いひとつ!」」

「まあ、人数的に妥当じゃねーのか。」

「じゃあ、始めな!」

「「了解!」 変身」!!」

俺は『新1号』、秀吉は『新2号』になる。

そして俺は、

「合体 フュージョン」!

「腕輪って使えるんですか?」

「腕輪を使った事がある奴だけ使えるようにした。」

「じゃあ、僕のは解らないね。」

「知りたかったら勉強しろっ。」

バキッ!

「ぐう!」

「だ、大丈夫ですか、吉井君!?」

「いまだ、秀吉!」

「うむ!」

ドンッ!

「きゃあ！」

体制を崩す姫路の召喚獣。
チャンスだ！

「ライダーダブルキック！！」

二人のキックが炸裂し、姫路の召喚獣がフィールドから出て、消滅する。

「姫路は、ここで見ている。」

宗一が言う。

「よしっ！」

「別のに変身するぞい！」

「ああ。」

「“変身”！！」

今度は、俺が『○○○オーズ』に、秀吉が『バース』になる。

「……………加速。」

「うおっ！」

「やあ！」

「あぶねっ。」

こっちは、愛子と康太。あっちは、雄二と姉さん。

「そっちが加速なら、こっちはこれだ！」

『ライオン・トラ・チーター!』

『ラタラタ・ラトラータ!』

、ラトラータコンボ'になる。

「何、この音楽?」

「音楽は気にするな。」

「……………今度こそ!」

「無駄だ!」

俺は、チーターの力を使い、対抗する。

「ハアアア!」

「……………何!?!」

康太を倒す。

『セルバースト』

あつちも終わりそうだな。

『タカ・トラ・バッタ!』

『タ・ト・バ・タトバ・タ・ト・バ!』

「これで終わりだ。」

『スキヤニングチャージ!』

「タトバ・ダイナミック・スリー!」
「きゃああ!」

愛子の召喚獣を倒す。

「残るは、」
「アタシ達だけね。」

残るは優子と明久。
今度こそ、優子に勝つ!

EX1 バカと秀吉と召喚獣（後書き）

EX1-2 ライダーの力

Side NO

「ハアアア!!!」

武器と武器がぶつかり合う。

士が優子と、秀吉が明久と戦う。
勝負は互角。

「くっ、超変身!」

士が変身してるのは、仮面ライダークウガ。

丁度、ドラゴンフォームに変わったところだ。

「ハッ!」

「タア!」

ガキン!

「ハアア!」

キンッ、キンッ!

両者、一步も譲らない。

一方、秀吉と明久の方は、

ガンッ、ガンッ!

「やはり、銃を持った相手と戦った事が無いようじゃな。」
「くっ……」

仮面ライダーギヤレンとなった秀吉に翻弄される明久。

『ドロップホエール、ファイアフライ、ジェミニゼブラ』

「ハアア！」

「えっ！？秀吉が二人！？」

「タアアア！」

ドオン！

ギヤレン（秀吉）のバーニングデバイドが決まり、明久の召喚獣が飛ばされる。

「ミギヤアア！ フィードバックで身体が燃えるように痛い！」

「あつ、すまぬ。」

フィードバックで苦しむ明久。

そして、互角の二人は、

ジリッ、ジリッ

二人とも睨みあって動かない。

「……なるほど、これが互角の戦いというものか。」

「どうということなの、坂本？」

「互いに隙がなく、むやみに攻撃すれば負けてしまう。だから、」

「……両者とも動けない。」

美波の質問に、雄二と翔子が答える。

「なら、さつさと攻撃させればいいさね。」

学園長はそう言つと、一枚の板を二人の間に投げた。
その瞬間、

ガキイン！！

二人の召喚獣の武器と武器がぶつかり、その場の者を圧倒させる。

「なあ、これで終わりにしないか？」

「そうね、行くわよ！」

「ああ！」

「ハアアアア！！」

優子の召喚獣のランスの動きに流されるようによける士。
そして、士の‘スプラッシュドラゴン’が決まった。

「………勝った。」

「……私の負けよ。」

これにて、模擬戦争が終結した。

side NO end

side 士

ふう、やっと終わった。

「これでいいんだろ、祖母さん。」

「ああ、十分データが集まったさね。礼を言うよ。」

「俺じゃなくて、あいつらに言ってくれ。」

そう言って俺は、戦う事を承諾してくれた皆を指した。

「そうだったね。あんた等には図書カードか食堂のタダ券を報酬に
してやるよ。」

「」「ありがとうございます」「」

「じゃあ、皆の衆帰るぞい。」

こうして俺らは帰っていった。

…が、

「どうしてウチは戦えなかったのよ。」

島田が聞いてくる。

単に忘れてただけなのだが、実際秀吉は、島田が戦う事に反対して
ため、

「秀吉が、島田を傷つけたくないって言ってたからだ。」

「ふえっ！？そ、そうなの、木下？」

「つ、土。な、何を言っておるのじゃ！？」

「証拠はあるぜ。」

そういつて取り出したのは、録音機。

「そ、それを渡すのじゃ！」

「いやだね。明久、パス。」

「オッケー。じゃあ、ムツツリーニ！」

「……………雄二。（ポイ）」

「ナイス。こつちだぞ、秀吉。」

「い、いい加減渡すのじゃー！！」

秀吉、魂の叫び。

今の状況は顔を赤らめる島田と、秀吉で遊ぶ俺ら。

…ああ、平和だなあ。

第27話 ” 清涼祭編開幕 ”

〔清涼祭アンケート〕

『あなたが今欲しいのは何ですか？』

姫路瑞希

『クラスメートとの思い出』

教師のコメント

なるほど。お客さんの思い出になるような、そういった出し物も良いかもしれませんね。写真館とかも候補になりえると覚えておきます。

土屋康太

『エッチな本× 成人向けの写真集』

教師

取り消し線の意味があるのでしょうか。

吉井明久

『カロリーー』

教師

この回答に君の生命の危機が感じられます。

士

いい加減、生活直せよ…

士

『強さ』

教師

藤堂君がこんな回答をするなんて、何かあったのでしょうか？先生

で良ければ相談に乗りますよ。

「助けて…兄…さん…」

「やめろ…！やめてくれ！」

「クツクツク。無駄だよ。」

ザシユツ…！

「れ…レン！ そ…そんな…！」

「安心しろ。残りの貴様の妹と弟をを殺した後にあの世で再会させてやるからよ！」

「……………か。」

「アア？何だ？」

「させるかって言ってるんだよ！」

「な、何！？」

「ウオオオオオ！」

ザクツ！

「テメエ、だけは、絶対、殺してやる！」

…いやだ。

「黙れ！」

…やめてくれ、こんなの。もう、いやだ…！

「ハアア！」

「いい加減にしやがれ！」

いやだ。 もう、やめてくれ…

ドゥン…！

兄…さん。 いやだ。

やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ
やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ
やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ

「うわあああ！」

ガバッ！

「ハア、ハア。 夢…か…。」

土の顔はとても青白くなっていて、体中汗でびっしょりだ。

「もうすぐ、3年たつのか。 あの時、俺がもっと強ければ…」

時刻は朝の4時

「とりあえず、もう、寝る気にはなれないから、シャワーでも浴び

てくるか。」

「学校」

Aクラス戦から1ヶ月。

もうすぐ、'清涼際'の季節である。

それにもかかわらず、Fクラスといえば。

「吉井！こいつ！」

「勝負だ、須川君！」

準備もせずに、校庭で野球をしていたため、今教室に残っているのは、

「…相変わらずだな。」

「でも、元気なのはいいことだと思います。」

「けど、方向性間違ってるじゃない？」

「うむ。準備もして欲しいのじゃ。」

「おっ！二人とも同じ意見か。（ニヤニヤ）」

「……………（ノノノ）」

教室に残ってるのは、士、瑞希、美波、秀吉、の、4人だった。

「二人とも、仲良しです。」

「だな。お前としては美波が幸せそうで嬉しいのと、ライバルが減った事に対する喜びが入り混じってるだろう？」

「そ、そんな事はありませんよ！」

「……（相変わらず嘘が下手だな）…まあ、いいや。それより、二人は付き合ってるの？」

「「ち、違うわよ（のじゃ）…！」」

「そ、そうか。（後は時間の問題か？）」

ピッ、ピッ、ピッ

「何をしたのじゃ？」

「優子の方は何するのか気になってな。」

「お主らは付き合っておらぬのか？」

「ああ。だって、優子は俺の事をそういう対象として見てくれなさそうだしな」

「（相変わらずにぶいのう）」

ガラッ！

「…土。」

「あっち。」

「わかった。すぐに連れて来る。」

「いってらー」

皆で話してるところに宗一がいる。

宗一は残りのクラスの奴らの場所を土に聞くと、すぐにそいつらのところに行った。

ガラッ

「おっ！1分30秒切ったぞ！」

「お前は…。まあ、いい。それより！」

仕切りなおす宗一。

「まだ、案すら決まってるのはウチのクラスだけだぞ！俺は教室を空けるが、戻ってきたときに案が出てこなかったら、」

「補修は1・5倍になるぞ。下手すりゃ2倍かもな。」

「皆、やるぞ！」

「「「おうっ！」「」「」

士と宗一が脅すと、一同は真剣になった。

（こんなん、平気なのか？）

第27話 ” 清涼祭編開幕 ” (後書き)

作「久々の投稿です。」

士「今回は、バカテストを入れてみました！」

作「試験勉強で、更新が遅れるかもしれないけど、」

作・士「これからも、よろしくお願いします！」

第28話　なんでまともな案が出ないんだ？

学園祭の出し物を決めるためのアンケートにご協力ください
『喫茶店を経営する場合、制服はどんなものが良いですか？』

姫路

『家庭用の可愛いエプロン』

教師

いかにも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、良い考えです。

土屋

『スカートは膝上15センチ、胸元はエプロンドレスのように若干の強調をしながらも品を保つ。色は――』

教師

裏面までびっしりと書き込まなくても。

吉井

『ブラジャー』

教師

ブレザーの間違いだと信じています。

土

明久。後で補修室でみっちり話を聞いてやるよ。

士

『その人それぞれに似合う格好。または、その店に合った格好』

教師

無難ですね。もう少し面白い回答を期待していたのですが。

士

アンタは俺に何を求めてるんだ!?

side 士

「さて、そろそろ春の学園祭、『清涼際』の出し物を決めなくちゃいけない時期が来たんだが――」

雄二は床にござを敷いて座る俺らを見下ろしながらそんな宣言をしてきた。

…ダリイ。

「む。どこにいくのじゃ、士?」

「便所だ。」

「姉上のところか? (ニヤニヤ)」

「…いくら俺でも、授業中に行くような事は……ない。……と思う。」

「何じゃ?」

「分からない。行くかもしれないし、行かないかもしれない。」

「なるほどのう。(ニヤニヤ)」

「あんましニヤついてると、美波に嫌われるぞ。」

「……………（ビシッ）」

簡単に引つかかるな。
じゃ、便所に行くか。

<廊下>

ん？あれは姉さんか？

「何してんだ姉さん？」

「……………これ。」

「ああ、召喚大会か。それがどうし——。…ああ、なるほど。」

姉さんが言ってたのは優勝者と準優勝者に渡される『如月ハイランド』のプレオープンペアチケットだ。

「たしか、『ここを訪れたカップルは幸せになれる』だっけ？」

「……………雄二が、プレオープンのチケットが手に入ったら一緒に行動してくれるって。」

「行かなかったら、代わりに教会に行くのか？」

「……………約束した。もし破ったらこの婚姻届に判を押してもらって。」

「」

「誰か、一緒に出てくれる相手でもいるのか？」

「……………優子が出てくれる。」

「ふーん。あつ！」

「……………どうしたの？」

「俺も出る。準優勝の『進化の腕輪』が欲しい。姉さんが優勝できなかったらチケットはあげるよ。」

「……………もし、決勝以外であたったら？」

「全力で戦う。それが礼儀だろ？」

「……分かった。」

「じゃ、俺はクラスのほうに戻らないといけないから。」

「……うん。」

そう言つて、姉さんと別れる。

さて、クラスはどうなってるかな？

<教室>

えっと、黒板に出てる案は、

『候補1：写真館「秘密の覗き部屋」』

『候補2：ウエンディング喫茶「人生の墓場」』

『候補3：中華喫茶「ヨーロッパアン」』

…えっと、まず、『候補1』

絶対、学校としてやらしてくれなさそうな内容だな。

つか、いろいろと不味いだろ。（特に女子からの反対意見とかが）

次に、『候補2』

「人生の墓場」って、客がこなそうだな。

何より、女子が2人、男の娘が1人、計3人しかいねーじゃん。

「土、可笑しなことを考えてはおらぬだろうな？」

「何も考えてないぜよ?」

「動揺しすぎで言葉使いまで変わっておるぞ……」

秀吉は無視して、『候補3』

…この中で一番マシだと思うが、とりあえず、どっちかにしてくれ。

「皆、清涼祭の出し物は決まったか?」

宗一が入ってくる。

「今のところ、こんだけだぜ。」

「何でお前が居ながらこんなものしか出ないんだ?」

「ワシは便所にいつちよったき、何も知らんぜよ。」

「何で、昔の話し方をしてるんだ?」

「こつちのほーが話しやすいき。まあ、直せというなら、直すけどな。」

「ああ。そうしてくれ。…で、これで全部か?」

「ああ、そうらしい。」

「……補修の時間を倍にしたほうがいいな。」

「もっと増やしていいんじゃない? 部活無い奴らは最終下校時刻ギリギリまでで。」

「「「なに!?!」」」

宗一が補修を倍にしたほうが良いっていうのに便乗して、もっとやらせようと思った。

「…ちなみに、お前も残るんだぞ。」

……マジ?

第28話　なんでまともな案が出ないんだ？（後書き）

作「どうでしょう？」

士「まともな奴がウチのクラスにはいないのか？」

作「大丈夫。まともな奴がやる気ないだけだから。」

士「何で、新しい腕輪を作ったんだ？」

作「面白そうだから。」

士「…とりあえず、

作・士「これからもよろしくお願いします！」

バカテスト集 1

問1

『活火山とは何でしょう』

姫路

『過去1万年間に活動した事がある火山』

教師

特に言うことはありません

土屋

『爆発した火山』

教師

残念ながらはずれです。火山の寿命は、およそ1万年なので、1万年以内に爆発した火山でなければ、死火山となります。

吉井

『活動する火山』

教師

漠然としすぎです

土

それ、文字の説明じゃねーか

問2

『火山前線とは何でしょう。また、それは、海溝から、約どのくらい離れているでしょう』

姫路

『海溝から最も近い火山を連ねた火山の事。海溝から数100?』

教師

流石は姫路さん。正解です。

土屋

『海溝の真下』

教師

典型的なミスですね。

土

間違えるなら、真下じゃなくて真上だろ。海溝の真下に火山があったら大変な事になるぞ

吉井

『火山でできた線』

教師

そのままですね

士

後で、補習室に来い

問3

『火山噴出物の火山ガスに1番多く含まれている気体は何か答えなさい』

姫路

『水蒸気』

教師

正解です

士

今度、明久たちに勉強を教えてやったらどうだ？

土屋

『分からない』

教師

分からないなら白紙で出してください

明久

『ガス』

教師

それは、反則です

士

分からないなら白紙で出せ

問 4

『マグマのね粘り気は何の割合によって決まるのでしょうか』

姫路

『二酸化ケイ素』

教師

正解です

士

ちなみにこれの割合が多いほど粘り気が強くなり、少ないほど小さくなるぞ

土屋・吉井

『
』

教師

特にいいません

士

ちゃんと勉強しろよ

問5

『地殻を作る岩石には、3つの種類がある
次の空欄をうめよ』

『火山活動で「
」ができる。これが風化・浸食され「
」となる。この2つが高温・高圧の地下深部に持ち込まれると「
」になる。』

姫路

『火山活動で「火成岩」ができる。これが風化・浸食され「堆積岩」
となる。この2つが高温・高圧の地下深部に持ち込まれると「変成
岩」になる。』

教師・士

特に言う事はありません

明久

『火山活動で「ピー」ができる。これが風化・侵食され「バキュー
ン」となる。この2つが高温・高圧の地下深部に持ち込まれると「
ズキューン」になる。』

教師

地殻をつくる岩石が大変な事に
士

… 課題2倍にするぞ

工藤

『火山活動で「〔閲覧削除〕」ができる。これが風化・浸食され「〔閲覧削除〕」となる。この2つが高温・高圧の地下深部に持ち込まれると「〔閲覧削除〕」になる。』

教師

いくら、保健体育で土屋君に負けて悔しいからってこんなことしないでください

士

… … … (ボンッ！)

優子

… 処理落ちしたわね

バカテスト集 1（後書き）

作「バカテスト集どうでしたか？」

士「何でこんなの作ったんだ？」

作「試験1週間前で、話を考えてる場合じゃないし、試験勉強にもなるからだよ。」

士「今日は理科？（地層・生物）の勉強か？」

作「ああ。これから1週間前は、この方針でいくつもりなんだが…」

士「この事に関して、何か質問や意見があれば、是非言って下さい。」

「

作・士「よろしくお願いします。」

バカテスト集2

問1

『陽イオンと陰イオンとが静電気力によって引き合ってる結合を何と言いますか。また、それによってできている結晶を何といいますか。』

瑞希

『イオン結合 イオン結晶』

教師

正解です

康太

『イオンの合体 イオンの子供』

教師

ふざけないで下さい

士

…保健体育まで少しは我慢しろ

明久

『イオン物質 イオンの結晶』

教師

何とか答えようとする気持ちが伝わりました

士

惜しいな。

イオンの結合だからイオン結合、イオンの結晶だからイオン結晶って考えれば覚えやすいぞ

問2

『イオン結晶は普段、電気を導かない。では、どういうときに電気を導くのでしょうか。』

姫路

『加熱・融解して液体にしたり、水溶液にしたとき』

教師

流石は姫路さん。

士

少しはその頭をあいづらに分けてやれないだろうか

康太

『……………液体にしたときっ！？（ブシャアア！）』

教師

何故、解答题紙が血まみれなのでしょうか？

士

液体から何を想像したんだ！？

明久

『導くようにひたすら努力する』

教師

この回答は嫌いじゃないです

士

何をどう努力するんだ？

問3

『金属の持つ性質を2つあげなさい』

瑞希

『延展性 金属光沢』

士

正解だ。

ちなみに、「熱が伝わりやすい」、「導電性」の2つも金属の性質だぞ

康太

『叩くと伸びる』

士

一応、正解だが、ちゃんと名称で覚えろよ

明久

『食べると身体に悪い』

士

金属じゃなくても、食べ物じゃなかったら身体に悪い…っていうよ
り、死の危険があるから止めといった方がいいぞ

問4

『イオン性物質の例を1つ、物質名と化学式をあげなさい』

瑞希

『NaCl ”塩化カルシウム”』

士

正解だ

康太

『MgOH₃』

士

物質名が書かれてないしけど、惜しいぞ。

”水酸化マグネシウム”は、「 Mg と OH ×3」が集まってできてる。

OH 3と、してしまうと、 $\text{O} \times 1$ と $\text{H} \times 3$ になってしまうから、 OH にカッコをつけなければならない。

だから、答えは「 $\text{Mg}(\text{OH})_3$ 」となる。

明久

『水酸化マグネシウムリボン』

士

今度は、化学式が無いぞ。

マグネシウムリボンじゃなくて、”マグネシウム Mg ”だ。

バカテスト集2（後書き）

作「勉強だりー」

士「でも、ここで落としたら大変だぞ。」

作「分かってるよ」

士「…今度は、保健体育を書くつもりなので、」

作・士「よろしく願いします!」

第28話　試験明けてテンション上がるよね

side 十

「先生！それは吉井が勝手に書いたんです！」

「僕らがバカなわけじゃありません！」

言い訳をする皆。

「……………つか、自分らがやってても、あんま変わんねーと思うけど？」

「……………」

「否定できないのかよ……………」

「まったくお前達は……………。少しは真面目にやったらどうだ？稼ぎをしてクラスの設備を向上させようとか、そういった気持ちはないのか？」

「いいのか、それ？」

「ああ、今回は特別らしい。」

「……………よっしゃあ！……………」

どーせ、後で何かやらせるつもりなんだろう。まあ、皆が活気づくにこしたことはないがな。

「出し物はどうする？」

「初期投資が少ない方がいいんじゃないか？」

「いや、利潤の多い喫茶店が良いんじゃないか？」

「ウェディング喫茶はどうだ？」

「リスクが大きすぎる」

意見にまとまりがないな

「静かにして！決まりそうにないから、店はさっき上がった候補の中から選ぶからね！」

皆のブーイングを眼力で抑える美波。

結局、多数決で、中華喫茶に決まった。

「それなら、お茶と飲茶は俺が引き受けるよ」

「……………（スクツ）」

康太と須川が立ち上がる。

「康太、料理できるのか？」

「……………紳士の嗜み」

「どうせ、覗き目的で中華喫茶に通ってたら覚えたんだろ？」

「……………ッ！（ブンブン！）」

ある意味才能だな。

「まずは厨房班とホール班に分かれてもらうからね。」

「厨房班は須川とムッツリーニのところ、ホール班は明久のところじゃー！」

息が合って夫婦みたいだな。

「それじゃ、私は厨房に――」

「「ストップ瑞希（姫路さん）！お前（君）はホール班じゃないと

！
「」

この学校で食中毒を起こすわけにはいかないんだ！

「え？吉井君に土君、どうして私はホール班じゃないとダメなんですか？」

「あ、えーと、ほら。姫路さんはかわいいから、ホールとして接した方が利益があるからだよ！」

「そ、そっだ。お前は可愛いんだから、常にホールに……」

「ん？どうしたの土？」

「何か、殺気が……」

殺気がしたほうを向くと、優子が満面の笑みでこっちを睨んでた。

「笑いながら睨むって……芸人だな。」

「お主を呼んでおるぞ。」

「秀吉、骨は拾ってくれよ。」

「うむ。」

骨の2、3本は、覚悟した方が良いかな。

～廊下～

「土？」

「はい」

「覚悟はできてるかしら？」

「できてるけど、何でこんな事になってるんだ？」

「う、五月蠅い！」

「ま、まで！その間接はその方向には曲がら……」

バキッ！

間接を外された。

「いってー。（ゴキッ）」

「自分で間接嵌められるのね…」

「ああ。つーか、こんな事してる上にずばらだからモテねーんじゃねーの？」

「ちよつと、行ってくるわ」

「秀吉に聞いたわけじゃねーよ。」

「じゃあ、何でずばらだと思ったのかしら？」

怒ってる優子も可愛いな

「ふえ！？」

「なあ、明久。俺、声に出してたか？」

「うん」

「どっから？」

「えつと、怒ってるって所から。」

「全部じゃねーか！」

「え！？い、いつから居たの、吉井君たち？」

「えつと、それは……」

「あはは……」

気づいてなかったのか？

最初っから居たのに。

「そ、その、さっきのホントなの？」

今聞くのか？

恥ずっ！

「あ、ああ。ホントだ。」

「えっと、その…あ、ありがとう」

「あ、ああ。」

こっちの優子も可愛いな。

…よし！ 今度は声に出さなかったぞ。

「「「……………（ジー）」」」

「お前らはいつまで見てんだよ！？」

「き、キス、しないんですか？」

「き、キス…（／＼／）」

「このタイミングでする奴があるか！宗一！助ける！」

「自分で何とかしろ（ニヤニヤ）」

「デメエー！！」

とりあえず、落ち着け、俺。

まずは、優子を教室に帰そう。

「優子、一旦教室に帰った方が良いんじゃないか？」

「え？ええ。そうね。それじゃっ！」

ふう、何とか逃げられたな。

「じゃあ、出し物の続きをシヨウナ？」

「「「は、はいいい！」」」

その後、何とか瑞希をホール班にでき、俺は厨房になり、この日の

討議は終わった。

「アキ、士、ちょっと良い？」

…まだあるのか？

第28話　試験明けてテンション上がるよね　（後書き）

作「久々の本編！」

士「疲れた……」

作「大丈夫、そのうち慣れるよ。」

士「まだ、俺に何かするつもりか？」

作「それはだな……」

士「それは？」

作「……次回のあとがきで！」

士「おい！」

次回もやるかは未定です。

第29話

問

『女性は（ ）を迎える事で第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める』

瑞希

『初潮』

教師

正解です

明久

『明日』

教師

随分と急な話ですね

士

『初恋』

教師

先生の初恋は小学3年生でした

康太

『初潮と呼ばれる、生まれて初めての生理。医学用語では、生理の事を月経、初潮のことを初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり――』

教師

詳しくすぎです

「アキ、士、ちょっと良い？」

放課後、帰ろうとしたところ、美波と秀吉に呼び止められた。

「どうした？」

「何か用？」

「用ってというか相談なんだけど。」

様子からして、重大な事なんだろう

「何だ？」

「僕らでよければ聞かせてもらっけど。」

「うん。ありがと。多分、アキがいうのが一番だと思うんだけど――」

――その、やっぱり坂本を何とか学園祭に引っ張り出せないかな？」

二人は喫茶店の成功には雄二の先導が不可欠だと判断したんだろう
美波がムキになってやらずに、雄二の力を借りるあたり、賢明な判断だ

：あいつが学園祭に興味を持っていればの話だが

「うーん、それは難しいなあ……。さっきも言ったけど、雄二は興味の無いことには徹底的に無関心だからね。」

「でも、アキが頼めばきつと動いてくれるよね？」

美波と秀吉が何かを期待した眼差しで明久を見る

「え？別に僕が頼んだからって、アイツの返事は変わらないと思うけど。」

「いや、そんなことないのじゃ。きつと明久の頼みなら引き受けてくれるのじゃ。」

「そりゃ確かに、よくつるんではいるけれど、だからといって別に――」

「だってアンタたち、愛し合ってるんでしょ？」

「もう僕お嫁にいけないっ！」

「……お前が行くのは嫁じゃなくて婿だ。美波、いくらこの本が売れるからって雄二は姉さんと付き合ってるし、明久は瑞希が好きなんだ。妄想と現実の区別ぐらいつける。」

そういつて俺は、懷から『坂本×吉井』の本を出した

「お主っ……」

「……俺のじゃなくて、優子のだ。だから、俺から距離を取ろうとするな！」

「知っておったのか？」

「ああ。本人は俺に気づかれてるなんて夢にも思っていないだろうな。」

「姉上の事どう思ったかの？」

「別に、居ままでとんなら変わりはないさ。そのくらいでは俺があいつに対する気持ちは揺るがないよ。」

「凄いわね。」

「普通だろ。」

「でも、それが土の木下さんに対する愛でしょ？」

「……話がずれたな。」

「……（逃げたな）……」

「どうして、雄二を引っ張り出さなきゃいけないんだ？」

気を取り直して、美波に聞きなおす

「本人には誰にも言わないで欲しいって言われてたんだけど、事情が事情だし……。けど、一応秘密の話だからね？」

「……わかった。」

かなり深刻な話らしいな

「実は、瑞希が転校するかもしれないの。」

「ほえ？」

処理落ちする明久

不測の事態に頭が付いていかないらしい

「処理落ちしてるぞ。」

「む。マズい。」

「このバカ！不測の事態に弱いんだから！」

「明久！目を覚ますのじゃ！」

「3人とも……、モヒカンになった僕でも友達でいてくれるかい……？」

「どっからモヒカンが出てくるんだ？」

「ある意味、稀有な才能かもしれんのだ。」

確かに

っ！か、モヒカンっていつの時代の不良だよ

「美波！姫路さんが転校って、どういうことさ！」

「どうもこうも、そのままの意味。」

「アイツの親の言う事にも一理あるけどな。」

「何故じゃ？」

「そうよ！アンタは瑞希が転校してもいいの！？」

「そうとは言ってない。」

「じゃあ——」

「瑞希は元々身体が弱い。なのに、この教室。それだけじゃない。

アイツは元々Aクラスレベルなのに周りにいる奴らの点数はFクラス。親が心配するのは当然だと言ってるんだ。」

「でも——」

「そうならない為に、俺らや雄二の力を借りるんだろ？」

「ええ。」

「設備の問題は今回の喫茶店を成功させればいい。レベルの問題は、Fクラス同士で召喚大会で功績を残せばいい。」

「なるほどのう。」

「俺は本々賞品の腕輪に興味があつてな。秀吉、一緒に出ないか？」
「分かったのじゃ。」

「雄二を呼ぶのは、明久に任せる。方法は問わない。」

「分かった。じゃあ、行ってくる。」

「どこにいるのか分かるの、アキ？」

「うん。何も相手の行動が読めるのは雄二だけじゃない。士と秀吉は――」

そう言うと、明久は雄二を引っ張り出す為の作戦を俺等に説明した
…でも、雄二はどこにいるんだ？

第29話（後書き）

作「クリムさん、感想ありがとうございます！」

士「ちなみに、作者は明日が英検の二次試験の日なので疲れきっています。」

作「だって、4日前（期末中）に一次試験の結果が来て、一昨日試験終わって昨日、今日で二次試験だぜ。」

士「酷いな。」

作「だから、諦めかけてるよ。」

士「とりあえず、」

作・士「これからもよろしく願います！」

第30話

「おつ、きたぞ」

「うむ」

「じゃあ、雄二。代わるな」

『おい。もしもし?』

作戦どおり、明久から電話が来たので、秀吉に代わる

「『……雄二、今どこ?』」

『人違いです』

ツー、ツー、ツー

「切れたのじゃ」

「凄い切り替えしだな」

「じゃあ、坂本たちが来るまで待つわよね?」

「ああ」

俺らは、明久と雄二が帰ってくるまで待っていた

（5分後）

「なるほど、姫路の転校か……」

「どう思う?」

「喫茶店の成功だけじゃ不十分だな」

「やっぱりな…」

「土も同じ事言ってたよね」

「じゃあ、説明は省くぞ」

「ええ」

「うむ」

雄二が対策を説明する

「まず、クラスのレベルなら、姫路と島田が召喚大会で優勝すればいいだろ」

「俺と秀吉も出るぞ」

「何でだ？」

「腕輪が欲しくてな。あと、姉さんと優子も出るらしいぞ」

「え？どうして？」

「優勝者と準優勝者に与えられるペアチケットが欲しいらしい」

「なんだと！？」

「その辺は祖母さんに聞いてくれ」

「それで、他には？」

「次は、設備だな。教室自体の設備と、備品の問題だな」

「畳の張替えは今日中にしてもらっぞ」

「いいのか？」

「別に、畳にみかん箱といった設備が変わんなきゃ問題ないだろ？」

「設備の問題はどうするのじゃ？」

「喫茶店の利益で何とかしなきゃならない」

「一応、許可は取ってるらしいが、どこまで変えていいのかは祖母さんに聞かないと分からない」

「それなら、早速学園長室に行こうよ」

「そうだな。学園長室に乗り込むか。3人は学園祭の準備計画でも考えておいてくれ。それと、鉄人を見かけたら俺達は帰ったと言ってくれ」

「了解した。ついでに霧島にもそう言っておこう」
「アキ、しっかりやってきなさいよ」
「オッケー。任せといてよ」

そう言つて明久たちは学園長室に向かった
そういえば……

「あいつ等、何で宗一に追われてるんだ？」
「また、何かしたのじゃろう」

ガラッ

「吉井と坂本を見なかったか？」
「今度は何したんですか？」

「女子更衣室の覗きだ」

「あいつら……」

「ちなみに、教えてくれたのは木下姉だ」

「2人は学園長室にいったぞ」

「そうか、すまないな」

そう言つて、宗一は出て行つた

「帰つたというはずじゃなかったのか？」

別に、2人が羨ましいわけじゃないぞ
校内の風紀を乱すのがいけないんだからな！

第31話

「ふー、危なかった」

「ああ。まさか鉄人が部屋の外で待機していたなんてな」

無事、二人が帰ってくる

「……チツ……」

（まさか逃げ切るとはな）

「土、本音が出ておるぞ」

「鉄人を待機させたのって、土か？」

「ああ」

「何で？」

「…シネ…」

ビュンッ…！

土が投げたカッターが、壁にめり込む

「「うおっ！」」

「ツギハハズサナイ…」

2 発目を放つ準備する土

「ねえ…もしかして、更衣室に木下さんがいたから怒ってるのかな？」

「ああ。多分そうだ」

「そんな！？ つ、士。僕は雄二が女子更衣室にいると思ったから行っただけで、悪いのは雄二なんだよ！」

「おい、明久！ テメエ、俺を売るつもりか！？」

「元々、大人しく霧島さんに雄二が捕まっただけで良かったんだよ！」

「何だと！？ やんのか、バカ久？」

「それはこっちの台詞だよ、アホ雄二！」

士を放置して喧嘩する二人

「オイ、シニタイノカ…？」

「すみませんでした！！」

士の言葉により、二人して土下座する

「凄い速さね…」

「あそこまで息の合っただけとはな」

「……」

「どうしたのじゃ、士？」

「……ハア…。お前らの頭が悪いのは良く分かった」

「さりげなく罵倒してないかの？」

「雄二、後で姉さんに報告するからな？」

「あ…ああ。」

「馬鹿は、玲さんに報告を…」

「それだけは勘弁してください！」

「…冗談だ。本当は…」

「本当は？」

「玲さんに来てもらうだけだ」

「本当に申し訳ありません！！」

「冗談だ。…二人とも、これに懲りたらもうしないように。じゃないと…命の保障はナイヨ？」

「（コクコク！）」

必死に首を縦に振る二人
息の合ったコンビネーションだ

「起こってる割には罰が軽いのう」

「…というより、罰すらなくない？」

「ん？怒ってるように見えた？」

「うん」

「ああ。まるで鬼のように怖かったぞ」

「じゃあ、成功か？」

「何がかの？」

「演技」

「…え？」「」

「？気づかなかった？」

「うむ。今度、演劇部に来ないかの？」

「気が向いたらな」

「え？じゃあ、最初っから起こってないって事？」

「ああ」

「…凄いわね」

全部、演技だった事に驚く皆

「まあ、少し羨まし…可哀想だと思ったけどな」

「…隠せてないのじゃ」

「だって、お前らだって好きな人の着替えとか見たいだろ？」

「開き直ったね」

「逆にここまで来ると凄いな」

「つまり、アンタは優子の裸を見たいということかしら？」

「まあ、そこまではいかないけど、そんな感じだ」

士たちが話してると…

ガラッ

「つかさ〜……どうしたの、皆？」

優子の登場

「い、いや……なんでもない」

「あ、木下さん。あのね、士がね……」

「もしもし、玲さん？」

「ごめんなさい」

「士が、お前の……」

「もしもし、姉さん？」

「すみません」

明久と雄二が、さっきの会話を話そうとするが、ことごとく失敗に終わる

「二人とも情けないのう」

「ねえ、士が何なの？」

「実はの……」

「秀吉、美波のこと好きか？」

「い、今は関係ないのじゃ！」

「じゃあ、美波のことが嫌い……」

「そうは言っていないのじゃ！」

「逆に大好き、愛してると？」

「そうじゃー！！……って、お主何を言わせておるのじゃー！」

「秀吉、大胆ね……」

「だから、違うのじゃ！」

「あ・言ってるけど、美波は秀吉のことどう思ってるんだ？」

「え、えつとその…（／＼／＼）」

「…単純な奴らだな」

秀吉も攻撃に参加するが、逆に、カウンターを受け、美波にも飛び火した

「（これで、安心だ）」

「ねえ…何だったの？」

「（か、可愛すぎる！）」

士が優子に萌えてる時、影が優子の後ろに忍び寄り…

「……………士が、木下姉の着替えが見たかったと言っていた」

「康太あゝ！？」

「ふえ！？」

「「「ナイス！ムツツリーニ！」」」

「しまった！完全に康太の存在忘れてた！…って言うか、さっき帰ったよな？」

「……………俺の嗅覚を嘗めるな」

「…どんな嗅覚だよ…」

士が呆れていると、優子が何かを決心したように士に歩み寄り…

「士…」

「は、はい！」

「そ、その……………そういうのは二人っきりのときに…ね？」

「……………（ブシャー！）」

「む、ムツツリーニ、大丈夫か？」

「……………死してなお、いつへの悔い無し」
「ムツツリーニイー！」

鼻血で気絶する康太

一方、士は…

「……………あ、危ねえ。一瞬、逝きかけた…」

「大丈夫か？」

「ああ。理性が飛びかけた（危ねえ…襲うところだった）」
「大丈夫、士？」

士を心配して近づいてくる優子

次回

理性が飛びかけた士がとった行動は！？

第31話（後書き）

作「久々の投稿だ」

士「どうしたんだ一体？」

翼「俺の方も書けなかったが」

作「後で活動報告に書くと思うけど、パソコンが壊れたから修理に出してたんだ」

作「ちなみに、作者は明日から合宿、その後、実家帰りするのでなかなか書けないと思う」

士「でも、ちゃんと、少しずつだけ書くから」

翼「期待しててください！」

本当に、申し訳ありません

第32話

「大丈夫、士？」

士を心配して優子が近づくが、

「……………」

「士？」

ギュッ
…

「っ、士?!」

「優子、可愛い」

「…暴走したな」

「…うん。」

士は暴走し、優子に抱きつく

「か、可愛い…（／／／）」

「姉上も処理落ちしかけておるのう」

「このままだと不味くない？」

「うむ。二人を放したほうがいいじゃろう」

そう言い、4人とも、二人を放そうとするが…

「いや！俺は優子のところにいるの！」

「……………（／／／）」

「ええい！いい加減離れろ！」
「やつ！」

「いくら可愛く言ったってダメだよ！（ボタボタ）」
「鼻血が出てるわよ、アキ」

「…このままの方が良いのかのう？」

「いや、鉄人を呼んできてくれ」

「確かに、土を止められそうなのは鉄人だけだもんね」

「優子、だーいすき！」

「………」

土の一言で時間が止まった

「つ、土！？（ボンッ）」

「姉上が処理落ちしたぞい」

「誰か鉄人を呼んで来い！」

「うむ！」

秀吉が宗一を呼びに行く

「………何故、鉄人を？」

「あの二人なら、このままベッドインもあり得るかも知れないからな」

「………（ブシャーー！！）」

「…ムツッリーニ、起きてこなかった方がよかったんじゃない？（ボタボタ）」

「アンタもよ」

「優子、だーいすき！」

「……お前は黙^{アンタ}ってる！」

「10分後」

事情を聞いて駆けつけてきた宗一が士を離そうとする

「士、離れる！」

「やだー！」

「5人とも、手伝ってくれ」

「「「「はい」「」「」」

6人がかりで更に15分かかって士を放したが、

「やだー！」

士は暴走したまま、宗一に殴りかかる

「ぐう！」

「鉄人と互角なんだね…」

「あいつ、化け物か？」

「くっ、ハアッ！」

「タアッ！」

ドンッ

バキッ

・ ・ ・

・ ・ ・

「……済まない、取り乱した」

あれから10分ごと、土が落ち着きを取り戻した

「あれほど暴走したのは初めてじゃないか？」

「ああ。」

「それほど、姉上の事が好きという事だったのかの？」

「……黙秘する」

「……それは肯定と同じ」

「じゃあ、暴走した時なんて言ったか覚えてる？」

「……（／＼／＼）」

「覚えているようじゃのう」

「……帰る（ダッ!）」

ガシッ！

「逃がさないぜ!」

「そうよ。せめて、優子が起きるまで待ちなさい（ニヤニヤ）」

「……雄二。私もあんな事言ってもらいたい」

「翔子!？いつの間に?」

「夫の服を脱がすのは妻の役目」

「どうしたらそんな話に飛躍するんだ!？」

「……今の内に（コソコソ）」

ガシッ！

「どこに行くつもりじゃ、士？」

「……………いい加減、諦めろ」

「宗一、助ける！」

「…最終下校時刻には帰るようにな（ニヤニヤ）」

「後で覚えてやがれ！」

場がカオスになった頃、

「…あれ？（ムクッ）」

優子、目覚める

「…！！（ジタバタ）」

「姉上、起きたのか？」

「ええ。（／＼／＼）」

「放せ！（ジタバタ！）」

逃げようとする士に優子が近づき、

「ねえ、士……………」

次回

予想通りの展開に！

第32話（後書き）

作「久しぶりの投稿だよ」

翼「まさか、こんな事になるとはね（ニヤニヤ）」

士「う、うるせえ（ダッ!）」

作・翼「あっ!」

作「…士が逃げてしまったので、今日はこの辺で終わりです」

翼「それでは」

作・翼「次回もお楽しみに!」

第33話

「ねえ、士」

「な、何だ？」

「そ、その……さっきのって……」

「俺の、本心だ（あーもう、どうにでもなれ！）」

「ホント！？」

「ああ。優子！」

「はい！」

急に名前を大声で呼ばれて、ビクツとする優子

「優子、好きだ。俺と付き合ってくれ！」

士の本気の告白

「はい！アタシも士が好き！」

ここに、新しいカップルが誕生した

） side 士

「…大胆ね、士」

「ワシらの前で、告白するとはの」

「／／／」

美波と秀吉の発言に顔を赤くする俺ら

「……………いい画が撮れた」

「いつの間に撮ってたの？」

「そんな事より！」

「逃げたな…」

くつ。本来こういうのは馬鹿あきひさの役割のはずなのに！

「ねえ、今僕を罵倒しなかった？」

「祖母さんに何て言われた？」

華麗なスルー

「条件として、俺等に召喚大会に出て優勝しろって言われたぞ」

「やはりな（ボソツ）」

「何か言ったか？」

「いや、何も」

「じゃが、ワシらも参加してしまったんじゃないが」

「士と秀吉でか？」

「うむ。準優勝の腕輪が欲しいと…」

「なら、平気じゃないのか？」

「そうじゃの」

こっちの問題も解決したようだ

ガラッ

「つかさー」

そこに、俺の友人の高峰真司が入ってくる……女装して

「土？」

「…コイツは男だ。それに、さっきも言ったように俺が好きなのはお前だけだ」

「え…あ…うん（／＼／＼）」

「何だ？彼女か？」

「今さつきからな。というよりも、お前が来るのは明日からじゃないのか？」

「普通は女装してる事に対して何か言うと思うんだが」

「いつもの事だろ？女装趣味の変態さん。良かったな、明久。仲間が来たぞ」

「そーかそーか。お前も俺と同じ女装趣味の変態…って違う！」

「分かってるって。どーせ、林檎に捕まったんだろ？」

「林檎って土の妹の？」

俺らの話に入ってくるFクラスメンバー

「ああ。あいつは、人を着せ替え人形にすることが好きでな」

「一度捕まったら、いろんなコスプレさせられるぞ」

「それは…その、アレだからじゃない？」

「お主らが女顔だからではないのか」

「「言うな！俺等が必死に目を背けてた事実を言うな！」」

最近、そういう扱いを受けてなかったから安心してたのに！
って言うか…

「それを言ったら、秀吉も危ないんじゃないのか？」

「いや、初対面でするほど無礼じゃないから大丈夫だ。初対面のときはな」

「ねえ（クイクイ）」

「何だ、優子？」

「吉井君、あのままでいいの？」

「あのまま？」

優子が指したところでは、明久が教室の隅でいじけていた

「そうだな…今何時だ？」

「もうすぐ最終下校時刻じゃ」

「そうか。おい！（バキッ）」

「イタッ！何するのさ！」

「そろそろ帰らねえと宗一に捕まって補習室行きだぞ」

「さあ、帰ろうか！」

「これでいいだろ？」

「普段、吉井君ってどんな扱いを受けているの？」

優子の疑問をよそに、俺らは帰宅して行った

第33話（後書き）

作「久々の投稿だから、変になってないかな」

士「さあな」

翼「新キャラも無理やり登場させたしね」

真司「気にするな」

作「とりあえず」

一同「これからもよろしくお願いします！」

第34話

「士、これは何だ？」

「見ての通り、机だ」

まったく、何を言ってるんだコイツは

「祖母さんは、私物を清涼際に使っなくなって一言も言わなかったぜ」

「だからって、こんな高そうなものを……」

「高そうじゃなくて、普通に売ったらかなり高いぞ」

「何で、そんなものをお主が持つておるのじゃ？」

愚問だな

「俺が作ったやつなんだから当たり前だろ」

「「は？」」

「この前、邪魔になるから1個売ったら700万円くらいになったぞ」

「「……………」」

他のも見てもらったら、普通に1個1000万以上の価値だ、って専門家に言われたしな

「ここにあるので幾らするんだ？」

「大体1億くらいかな」

「「1億!？」」

「あ、別に壊しても平気だよ。趣味で作ってるだけだし」

「そ、そうか…」

「何故売らぬのじゃ？」

「そこまで金が必要ってわけじゃ「みぎゃー！」なんだ？」

見ると、明久が俺の机の上で貼り付けにされてた
つたく…

「おい、机が傷むからやめろ。」

「で、でも…」

「お前らはこのクラスの女子にこの設備で3ヶ月すごせというのか
？」

「それは駄目だ！」

「なら、準備に集中しろ。明久を殺るのはいつでも出来るが、清涼
際は一回しかないんだ。気を引き締めろ！」

「「Yes my princess！」」

もう1個作るのは面倒だからいやだぞ

「助かったよ」

「今度は何をしたのじゃ？」

「姫路さんと、接客の練習してたら…」

「相変わらずだな」

今度、喧嘩の仕方教えてやろうかな

「まあ、土のおかげで助かったんだからいいじゃないか」

「そういう問題じゃないよ…」

キンコーンカーンコーン

「昼休みだな。じゃあ、昼休みが終わるまでに帰ってくるように！」

皆、解散！」

俺の言葉で、皆、昼食を食べに行った

「っーかーさー！」

ヒュッ（真司のパンチをかわす俺）

ガッ（逃げようとする真司を捕まえる）

バキッ（真司の顔を殴る）

ドン！（壁にぶつかる真司）

「何のつもりだ？」

「なんとなくだが？」

ガガガガッ！（1秒で10発パンチを打ち込む）

「何か言い残す事は？」

「ひたすらごめんなさい」

「仕方ない、あいつにもここに来てもらうか（ボソッ）」

あいつなら、コイツの相手をしてやれるからな

「っーかーさー！」

今度は優子の登場

ドンッ（優子が俺に飛びつく）

ドサツ（勢いに耐え切れず倒れる俺）

ギョッ（俺を強く抱きしめる優子）

結果、周りの目が生暖かいものになる

「お主ら…」

「もうそこまで進んだのか？」

「何を想像して顔を赤くしてるんだお前ら！？」

「……雄二、私も雄二の子供が欲しい」

「そんなのしてないからね！」

「「……え？」」「」

「当たり前だ！」

「チッ、つまらん」

「やっぱ、夏海を呼ぶか…」

「皆、お昼食べないの？」

「まず、どいてくれ」

「いや」

「頼むから」

「やだ」

「姉上…」

「完全に甘えてるな」

「もういい…。飯、食うぞ」

「そうだな」

やっと、食事に入れるよ

優子、今度は俺のターンだからな。覚悟しとけよ！

第34話（後書き）

作「疲れた」

士「報告があるんだろ？」

作「ああ。もし、登場させたいキャラクターや、やって欲しいストーリーがあれば、」

翼「ぜひ、言って下さい」

士「無理に出さなくてもいいです」

作「気が向いたらしてくれればいいので」

一同「よろしく願います」

第35話

「いい天気だね」

「そうですね」

俺らは屋上に來ていた

日差しが暖かくて気持ちいい

「あの、皆さん……」

瑞希が何か言おうとしてる

…殺人兵器を持って

「んじゃ、さつさと食おうぜ」

「うむ、そうじゃのう!」

「……………空腹」

「あ、ああ。さあ、飯だ飯!」

「僕もソルトウォーターあたりを!」

皆、真司以外の男子は殺人兵器を回避するため自分の弁当を取り出した

もちろん俺もだ

「姫路、その弁当どうしたんだ?」

しまった!

真司が余計な事を……

「その、皆さんに、お弁当を…」

「明久、良かったな！塩水なんかより栄養になるぞ！」

「いやいや、そういう雄二こそ食べなよ！」

「ねえ、どういうことなの、士？」

「あいつの料理は人を殺せるんだ」

「どういうこと？」

百聞は一見にしかず、だ。

「瑞希、その弁当に何の薬品を入れた？」

「え〜っと…」

次々に、薬品名を言っていく瑞希
それと同時に顔を青くする皆

「皆さん、どうかしました？」

「い、いや、なんでもない」

（真司、逝け！）

（何で俺が！？明久が逝け！）

（そうだな。皆、明久が逝くってことで異論はないか？）

（（（（（応！））））））

（そんな！？）

「皆で分けて食べようよ！」

「悪いな、俺は優子と楽しく食べるんだ」

「／／／」

「なんであんな事しといて今更顔を赤くするんだ！？」

「じゃあ、雄二は…」

「……雄二、一緒に食べる」

「そ、そうだな！じゃあ、後でな！」

どこか（多分Aクラス）に行く二人

「くっ。じゃあ…」

「ひ、秀吉!」

「ふえ!？」

「そ、その…一緒にお弁当食べよう?」

「う、うむ（／＼／＼）」

美波のおかげで、死は回避できたようだな

「秀吉にも遂に春が来たんだな」

「まだ、早いんじゃない?だってあの二人、付き合っていないんでしょ?」

「どっちかが告白すればくっつくんじゃない?」

「吉井君と姫路さんみたいね」

「たしかに「ブシャァー!!」何だ?」

見ると、愛子のスカートの中を見て鼻血を出す康太がいた
出血多量で死にそうだな

「土は見ちゃダメ」

「分かっているって。つーか、康太も幸か不幸か分からん奴だな」

「……………わが生涯に一片のくいなし…」

「ラ〇ウかよ」

「真司、姫路さんと僕じゃ食べきれないから一緒に食べよう!」

結局、真司と明久が犠牲になることで幕は閉じた

午後

「接客は接客の、厨房は料理の練習をするんだ」

「Yes my prince!」

俺は男だっって言っても聞かないんだろうな

「ひ、姫路さん！どこに行くの!？」

「厨房ですけど？」

「姫路さんはホールだよ!？」

「あつ、そうでした。すみません」

ナイスだ明久

「そのまま明久を客だと思って練習しろ」

「あ、はい!（／／／）」

今日はこのまま、個人練習をして終わった

第36話

『これより、召喚大会第1回戦を始めます!』

校庭に作られたステージ。そこで大会が催される。

「頑張つて、士!」

「「士君、木下君、可愛い!!!」」

流石に大会だから人がいっぱい来てるな……って違う!

「何で、観客がこんなに多いんだ!？」

3回戦までは一般公開じゃないだろ？

「皆、校内じゃからな」

「他でもやってるのに、何でここなんだ?」
「つか、相手さんの応援がないのが可哀想だな」

「「うるせえ!!!」」

相手は、3年Aクラス

「では、召喚してください」

「「サモン!」」

『Aクラス

モブA

&

Aクラス

モブB

数学 327点 & 285点

」

「俺らの扱い酷っ!?!」

流石はAクラスといったとこだな

「結構点取れてるねえ」

「お主に比べたら取れてないじゃろっ」

「さっさとしろ!」

短期は損だよ?

「そんじゃっ」

「行きますか!」

「サモン!」

『Fクラス 藤堂士 & Fクラス 木下秀吉
数学 1260点 123点
』

「おかしいだろ!?!」

「一々うるせえ雑魚だな」

「士、声に出ておるぞ。」

「馬鹿にしゃがって!」

モブAが突進してくる
けど、動きが単調すぎるな

「くっ！」

モブAが体勢を立て直そうとする

「んじゃっ」

「行きますか？」

今度はこっちのターンだ

「「変身！！」」

秀吉はギルスに、俺はナイトに変身した

「お前はギルスか」

「カッコいいじゃろ」

「じゃあ、お前はモブBを頼む」

「了解したのじゃ」

そういつて真司はモブBの方に向かっていった

フュージョン
「合体！」

初っ端から飛ばしていくぜ！

「ハッ、ダアッ！」

「そんな闇雲に振り回しても当たんねえよ」

「クソッ！」

ブン、ブン（モブAが槍を振り回す音）

キンッ、キンッ（それを受け流す）

そろそろ飽きてきたな

「終わりだ」

『ファイナルベント』

「飛翔斬！」

「うわあああ！」

数学は楽だったな

「ギルスヒールズクロウ！」

向こうも終わったようだな

「勝者、藤堂&木下ペア！」

「「「キヤアアア！！」「」」

黄色い声が響く

「なんつーか……あいつら可哀想だな」

「…つむ」

俺らは何か、申し訳ない気持ちでその場を後にした

〈教室〉

「お、覚えてろよ!」

何だ?

「おう、二人とも勝ったみたいだな」

「数学で土に勝てるものはおらぬ。それより、どうしたのじゃ?」

「なーに、ただの営業妨害だ」

「そうか」

このまま何もないといいけどな

何か、いやな予感がする。少し、調べてみるか…

第36話（後書き）

作「久々だ！」

翼「俺のは？」

作「今日か、明日に投稿するよ」

翼「分かった」

ちゃんと投稿できたらいいなあ

第37話

「……………ちょうどよかった」

俺らが帰ってくると康太がそんなことを言ってきた

「どうしたのじゃ、ムツツリー二？」

「……………営業妨害の客が来てる」

見ると、ハゲとモヒカンが騒いでいた

『何だよこのくそ不味い料理は！』

『こんなの食えるか！』

……………なるほど

「康太は宗一を呼んで来い。秀吉は……………（ボソボソ）」

「……………わかった」

「承知したのじゃ」

2人に頼み事をして、俺は^{がいちゅう}変態駆除をしに行く

「どうしましたか？」

「どうもこうも、ここの料理が不味いんだよ！」

「そういうことは大声で言わないでください。偶々あなたたちの口に合わなかったただけで他のお客様の迷惑となるようなことはしないでください」

「ふざけんなよ！先輩にそんな口聞いていいと思ってんのか！？」

「なら、先輩らしい行動をしてください。学校の代表である3・A
ともあるう人が…とんだ恥さらしですね」
「いい加減にしろ！」

ドンッ！

変態^{がいちゅう}が、机を叩き傷がつく
そして俺は襟首をつかまれた

「いったい何があつた!？」

そこに、宗一登場！

「まず、これを食ってくれ」

宗一に、害虫が不味いといった料理を食わせる

「普通にうまいな」

「だろ？なのにその2人は不味いと散々騒いだ拳句、故意に机を
傷つけたんだ。そうですよね、皆さん？」

『そつだ!』

『すごい迷惑してたんだ!』

俺の言葉に客は皆、賛同する

「常村、夏川、これはどういうことだ？」

「えっと…その…」

「言い訳は補修室で聞いてやる！」

「なっ!?!」

宗一は常夏コンビを担いで補修室に行こうとする

「ちょっと待った」

「何だ？」

「証言だけでなく、証拠もあったほうが良いと思って秀吉に今までの映像を撮ってもらったんだ」

どんどん常夏コンビの顔色が悪くなる

「あと、故意に傷をつけた机代をこいつらに払ってほしいんだ」

「いくらだ？」

「本来なら400万とかだが、今回は初犯だし、二人合わせて100万でいい」

「「高すぎだろ！？」」

「この机自体700万くらいの価値があるんだ。傷ひとつで500万くらい価値が下がる。それなのに100万でいいって言ってるんだから優しい方だぞ」

人によつては、机代自体を払わされるからな

「わかった、こいつらの親に全て伝えておこう」

「頼んだぞ」

今度こそ、宗一は帰っていった

これからしなきゃならないことは……

「見苦しいところをお見せしてしまい申し訳ありません。今この場にいる方に限り、全品半額にさせていただきます。どうかご理解とご協力をお願いします」

客を逃がさないことだ

なんとか、客を逃がさずには済んだが、害虫どもはきつと懲りずにまたするだろう

「鮮やかな手際だな」

「真司に学園最低コンビか」

「「オイッ！」」

「冗談だ。俺は少し疲れたから休むぞ」

「ああ。わかった」

雄二に許可を取り、休憩することにした

……このまま何もないといいけど……

第37話（後書き）

作「1週間ぶりの投稿」

士「あー、すつきりした」

翼「常夏コンビの扱いが酷いな」

士「100万なんて金額、親が見たらどう思っただろうな」

作「…やりすぎた？」

士・翼「いや、全然」

作「……と、とりあえず」

作・士・翼「次回もお楽しみに！」

常夏コンビファンの方、申し訳ありません

第38話

「それでは、試験召還大会2回戦を始めます！」

今度の教科は、英語だ

「」「」「サモン！」」「」「」

幾何学的な模様とともにそれぞれの召還獣が呼び出される

『Aクラス 久保利光 & Eクラス 清水美春
』

347点 118点

同性愛者コンビだ

『Fクラス 藤堂士 & Fクラス 木下秀吉
412点 78点
』

「英語はまだまだだな」

「まだ、手をつけておらぬからの」

「美春は優勝してお姉さまと……」

あー。言いにくいな

「ミハ、たぶんそれは無理だぞ」

「何故ですか？」

「秀吉の心に火をつけたからかな？」

「？何故疑問け…」

「士、久保は頼むのじゃ！わしは、清水を倒さねばならん！」

「はいはい」

「そういうことですか。なら、美春も全力で行きます！」

そんなこんなで、また1対1の形式になった

「じゃ、よろしくね久保君」

「よろしく頼むよ」

「んじゃ、合体！そして、変身！」
フュージョン

♪

『ソードフォーム』

「俺、参上！」

電王のソードフォームに変身した
俺のはイマジンがいなくてもなるんだな

「いくぜいくぜいくぜ！」

「読みにくいよ！」

「細けえ事は気にすんな！」

ギイン

「くっ！」

「止めだ！」

『フルチャージ』

「俺の必殺技パート2！」

ドオン！

「決まったぜ！」

「僕の完敗だよ」

ズドドドド…！

爆音がしたので、秀吉たちのほうを見てみると…

「なんというか…すごいね…」

「いくらなんでも、やりすぎだろ」

ケルベロスランチャーでミハの召還獣を蜂の巣にしてる秀吉がいた

『Aクラス 久保利光

&

Eクラス 清水美春

斬殺

銃殺（蜂の巣）

』

「何で点数の代わりに死に方を出してんだよ！」

俺の叫びが体育館にこだました

・
・
・

・ ・ ・ ・ ・

「あまり客が来てないな」

「うむ。何故じゃろうかの」

「まあ、屑コン…害虫コンビの仕業だろうな」

「言い直す意味ないぞい」

「細かいことは気にするな！」

さて、どう料理おしおきしよう

「ただいまー……って、あんまりお客さんがいないなあ……」

「お、戻ってきたようじゃの」

明久も帰ってきたな

「どうだった？」

「無事勝ってきたよ」

「それは何よりじゃ。ところで、雄二の姿が見えんが？」

「うん。トイレによってくるってさ」

「なるほど…。つまり、トイレで霧島のことを妄想しながら…」

「真司…。お前は何がしたいんだ？」

「さっきまで空気だったからだ」

「つまり、話に混ぜてほしいと？」

「そういうことだ」

真司も加わって、4人で害虫が行きそうなところを考えていると…

『お兄さん、すいませんです』

『すみません、義兄さん』

『いや。気にするな、チビツ子ズ（今、お兄さんの発音が違った気がしたんだが）』

ん？

この声はもしかして…

第38話（後書き）

作「最近、投稿できない」

士「文化祭の実行委員で忙しかったのに、文化祭終わった直後に別の実行委員になるからだろ？」

翼「俺のほうは？」

作「いいじゃん。面白そうだったし」

翼「俺の…」

士「そういう問題じゃないと思うんだが」

翼「おい！！！」

作・士「うわっ！」

翼「俺のほうは何時投稿するんだよ！？」

作「多分、明日あたりに投稿する予定だ」

翼「よかった…」

士「そういう事で」

一同「これからもよろしく願いします！」

バカテス集3

第一問

『資源とは何でしょう?』

姫路

『人間がその生活の維持、向上のために働きかける対象としての自然界の一部』

教師

流石は姫路さん

士

『人が生きるために必要な自然の一部』(これからふざけます)

教師

どうして……ふざけないでください

士

断る

明久

『金属とか?』

教師

回答に?を書いたのは君が初めてです

第二問

『物質資源の例を2つあげなさい』

瑞希

『鉱物資源・生物資源』

優子

『水資源・土壌資源』

教師

特に言う事はありません

士

『金属、非金属をあわせて鉱物資源』

教師

中途半端に答えないでください

明久

『鉄、銅とかが金属で、石灰石、セメントとかが非金属』

教師

あなたは金属が好きなんですか？

バカテス集3（後書き）

作「試験やべー」

士「書くのはいいけど、本文とバカテスと集で分けたらどうだ？」

翼「そっちの方が読者も分かり易いだろ？」

作「わかった。じゃあ、テスト問題っていう題名にしよう」

士「大丈夫なのか？」

作「さあな」

士「運まかせかい！」

勝手な都合ですみません

第39話

「雄二が戻ってきたようじゃな」

「あ、うん。そうみたいだね」

『んで、探してるのはどんな奴だ？』

ガラツと音を立てて教室のドアが開き、雄二の姿が見えた
話し相手は…？

「なんだ、林檎か」

「なんだじゃありませんよ。清涼際の事まったく言わないなんて酷いです」

「些細な事だろ？つつーか、お前が一人でここにこれるわけがないから、大樹達もいるのか？」

「はい。大樹さんは、学校まで案内してくれました。そういえば、転校して来るらしいですよ」

「ふーん。じゃあ、ここまでは雄二に連れてきてもらったのか？」

「いえ、途中までは夏美さんといたんですけど…」

『笑いのつば！』

「…真司のどこか？」

「…そうみたいですな」

俺らが会話してると…

「「殺るわよ！」」

「「ぶあつ!？」」

……わーお

「やっぱり普通な奴がこのクラスにはいないな」

「そうみたいですな」

「瑞希。そのまま首を後ろにひねって。ウチは膝を逆方向に曲げるから」

「…人って普通あんなことされたら死にますよね? そうでなくても、不登校になりますよね?」

「…そうだな」

「落ち着いておらんで二人を止めてほしいのじゃ!」

このクラスの唯一の常識人の秀吉に言われたら止めるしかないな
まあ、そろそろ止めないと面倒な事になる気がするしな

「二人ともいい加減にしろ」

「何で止めるんですか!？」

「そうよ! ウチの妹をたぶらかしたんだから殺させなさいよ!」

…まったく

「そんなのガキの戯言だろ? それに、子供の教育に悪い事を見せてトラウマになったらどうするんだ?」

「うつ…」

「瑞希、一人前に嫉妬したかったらちゃんと気持ちを伝えてからにしたほうがいいぞ。嫌われる原因になるからな」

「はい…」

俺の言葉を受け、何も言い返せない2人

「相変わらず、手馴れてるな」

「開放されたのか、真司？」

「何とかな」

「ああっ！」

「あんだよ、明久？」

「おもいだした！あのときのぬいぐるみの子か！」

いまさらかよ…

そして真司は今度は林檎に連れてかれる

「ぬいぐるみの子じゃないです。葉月ですっ」

「…土。お主は華麗に忘れられてるようじゃな」

「…いうな。考えないようにしてるんだから」

「助けるよ!？」

「真司、うるさい黙れ」

「酷っ!？」

どうせ、いつも通りだろ

いや…夏美もいるからスペシャルバージョンになるな

「ところで、この客の少なさはどういうことだ？」

教室内を見渡す雄二。

…ん？

「どうした、葉月？」

「可愛いお兄ちゃん。葉月、ここにくる途中でいろいろな話を聞いたよ?」

…可愛いって……

まあ、いいや…

「で、どんな話だ?」

「えっとね、中華喫茶は汚いから行かないほうがいいって、なるほど…」

「害虫コンビか?」

「ん?開放されたのか?」

「いや、逃げてきた」

「かつこいいお姉ちゃん、こんにちはです!」

「俺は男だよ?」

「すみません。女装のおにいちゃん」

「……」

「声押し殺してさめざめと泣くなよ」

葉月のネーミングセンスは凄いな

「コホンッ!」

「ん?どうした、雄二?」

「そろそろ話を戻したいんだが?」

「…すまない」

調子に乗りすぎたかな?

「あいつら、そこまで暇なの?」

「さあな」

「とりあえず、どこまで広がってるかを確認しないとな」

「そうだな」

「…………… 7人とも、島田の妹達を連れて、噂の流れた場所を探すついでに昼食をとってきたらどうだ？」

「そうするか？」

「「はいです・うん」「」」

「康太、今日は結構しゃべったな」

「…………… がんばった」

「それでチビツ子、さっきの話はどの辺で聞いたか教えてくれるか？」

「えっと…………… 短いスカートを穿いた綺麗なお姉さんが一杯いるお店」

「雄二、それはすぐに向かわないと！」

「そうだな明久！」

「…………… つ！（シュパッ！）」

葉月の話が終わる前に、いなくなる3人

「つーか、康太は店番するんじゃないかったのか？」

「すぐ戻ってくるじゃろ」

「場所、分かるのか？」

「わかんなくてもたどり着くと思うぞ」

「本当にそんな気がして怖いのじゃ」

その後、葉月にクラスを教えてもらって、そのクラスに向かった
…店の前でぐずる雄二が目に見えなくなる

第40話

「明久、ここはやめよう」

「ここまできてなにをいつているのさ！早く入ろうよ！」

「頼む、ここだけは、Aクラスだけは勘弁してくれ！」

やっぱり…

「『綺麗なお姉さん』って単語だけでここに直行できるってどんな才能だよ…」

「ある意味天才ですね」

雄二と明久は、メイド喫茶『ご主人様とおよび』の前にいた。

「もしメイドがこれをいったら…」

「…確実にクビだな」

「お前らはこれを見てなんとも思わないのか!？」

見ると、真司が夏美に腕を組まれ（関節技）ていた

「3人と一緒にダッシュで行こうとするお前が悪い」

「お義兄さん、いい加減素直になったらどうです？」

多分、一生素直にならないだろうな

…ん？

「……………!!（パシャパシャパシャパシャ!）」

康太、なんでここにいるんだ？

「Fクラスってすごいですね」

「アフリカ異常も何人かいるしな」

「土屋さんとかですか？」

「ああ。……で、康太。お前何してるんだ」

「……………敵情視察」

「写真とる意味あるのか？」

「そうだよ、ムツリーニ。撮られてる子が可哀想だと……」

「……………一枚100円」

「2ダース買おう……可哀想だと思わないのかい？」

「アキ、普通に注文してるわよ」

簡単に買収され、瑞希たちに頬をつねられてる明久。
ちなみに真司は、

「買ったらどうなるか分かってるわよね？」

「（コクコクコクコク！）」

という状況だ

「つたく、せめてムツリ商会利用してるやつらだけにしておけよ」

「そういう問題じゃないと思いますけど……」

「……………木下優子の写真、1枚100円」

「全種類3枚づつ買おう」

「……兄さん、普通に注文してますよ？というか、何で3枚なんですか？」

「決まってるだろ。手持ち用、観賞用、保存用の3つだ」

「手持ち用はいらなと思いますよ？」

「じゃあ、2枚づつにしてくれ」

「……………毎度」

そう言つて、俺に写真を渡して康太は帰っていった

「それじゃ、雄二。（ポン）」

「（ポン）」

俺と真司と明久が雄二の肩に手を置き…

「『いい加減あきらめろ』」

見事なハモリを見せる

「……………くそっ！」

雄二もようやく腹をくくつたようだ

「それじゃ、入るわよ。お邪魔しまーす」

美波を先頭にし、メイド喫茶に入る

「『お帰りなさいませ。お嬢様』」

出迎えてくれたのは、姉さんと優子

「それじゃ、僕らも」

「ふむ、流石はAクラスじゃ」

「『お邪魔しまーす』」

続いて、雄二と俺を除いて全員が中に入る

「「お帰りなさいませ。ご主人様にお嬢様」」

流石は優等生。模範的な演技だ

「チツ…」

「……ハア」

その後が続いて俺が嫌がる雄二を連れて入る

「……お帰りなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン」

雄二に対してかなりのアレンジを加えて迎える姉さん

「お、お帰りにやさいませ。ご主人様、こ、今夜は一晩中アタシと遊んでほしいにや」

いつの間にか猫耳メイドになって顔を真っ赤にした優子がさらにアレンジを加えて俺を出迎えた

「姉さん、優子をテイクアウトで」

「……分かった」

「姉さん、そこは止めてください。兄さんも、そういうのは後にしてください」

「すまん、つい…」

「（ノノノ）」

「今は、すべきことに集中してください。それと、これで何回目ですか？」

「分かった。それと、初めてだ」

「じゃあ、今夜は赤飯ですか？」

「明日の朝だ」

「楽しみにして」ちよつとまで「何ですか？」

「今はすべきことをするんじゃないのか？」

「そうでしたね」

思いつきり忘れてたな

あ、優子がトリップしたままだった

取り敢えず、優子を元に戻してから、注文するか

「・・・」メイドとの婚姻届”を2つ・・・」

どうやら、先に注文していたようだ

…何で婚姻届が2つ要るんだ？

第40話（後書き）

作「1ヶ月ぶり？」

士「多分な」

翼「秀吉、ほぼ空気だな」

林檎「きつと、作者が書き忘れたんですよ」

作「秀吉様、ごめんなさい。ごめんなさい、ごめんなさい・・・」

士「作者が死んでるけど、取り敢えず・・・」

士・翼・林檎「これからよろしくおねがいします！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4680t/>

バカと仮面ライダーと召喚獣

2011年12月2日17時46分発行